

松本市島内遺跡群

高 松 遺 跡

—県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書—

1989・3

松本市教育委員会



遺跡周辺の地形



第1号住居址出土土器



第3号住居址出土土器



52K 底面 朱墨



9H 内面暗文 ミガキ

序

島内地区は松本市の北西部一帯を占め、梓川と奈良井川に囲まれた平坦で肥沃な穀倉地帯として知られていますが、また、古代からの遺跡が点在するところもあります。高松遺跡もその一つとして、以前に土器や古銭を出土し、注目されていたところがありました。一方この島内地区では、折から県営は場整備事業が進行中で、長野県松本地方事務所からの委託を受けた松本市教育委員会は、過去5年次にわたり数か所の遺跡を調査してまいりましたが、今回の高松遺跡の調査が当地区における県営は場整備事業に伴う発掘の最後のものとなりました。

発掘調査は水田の取り入れが済んだ10月末から11月の下旬にかけて実施し、幾多の成果を認め無事終了しました。島内地区で初めての奈良時代の竪穴住居跡の発見や、たくさんの石を投げ込んだ平安時代の竪穴住居跡の存在など、新しい所見があったことは本書の記すとおりです。

翻ってみると、高速交通網時代の先駆として松本市を縦断した長野自動車道の、その建設に伴う遺跡の調査はこの島内地区でも長野県により大規模に行われ、多大な成果を私どもの眼前に示してくれました。これに及ぶべくもありませんが、当市教委の過去5年間にわたる資料の蓄積も一緒に合わせ見たとき、さらに地区の歴史の解明が進むものと言えましょう。またそれを願って止まぬものであります。

最後に、今回ならびに以前の調査の実施にあたり多大な御理解、御協力をいたいたい島内土地改良区、また甚大な御援助をいたいたい島内公民館、出張所及び地区的皆様に心より謝意を表し、さらに地域の一層の文化財保護の機運が高まるることを重ねて願い序といたします。

平成元年3月

松本市教育委員会

教育長 中島俊彦

例　　言

- 1、本書は、昭和62年10月29日から11月27日にかけて行われた島内遺跡群高松遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2、本調査は、昭和62年度県営ほ場整備事業島内地区に伴う緊急発掘調査であり、松本市が長野県松本地方事務所から委託を受け、松本市教育委員会が実施したものである。
- 3、本書の執筆は、第1章：事務局、第2章第1節：太田守夫、その他は直井雅尚が行った。
- 4、本書の作成にあたり、作業分担は次のとおりである。

土器復元　五十嵐周子、直井由加理

土器実測　岩野公子、金井ひろみ、町田庄司、若井孝夫

鉄器処理　神沢昌二郎

鉄器・土製品実測　岩野公子

遺構図整理・トレース、遺物図トレース、遺構写真撮影　直井雅尚

- 5、遺物の写真撮影は宮崎洋一氏にお願いした。

- 6、本書の編集は事務局が行った。

- 7、本書に掲載した図類の縮尺は基本的に次のとおり。

土壤の平面図、流路址の断面図　1：60

上記以外の遺構平面図　1：80

土器・陶器の実測図　1：4

土製品、鉄器の実測図　1：2

- 8、発掘調査において、桐原健氏（松本市文化財審議委員）、大久保知巳氏（日本考古学協会会員）整理作業において、原明芳氏（長野県埋蔵文化財センター調査研究員）の御指導、御教示を賜った。記して感謝申し上げる。

- 9、本調査に関する事務書類及び測量図面類、写真、遺物、実測図などは松本市立考古博物館が保管している。

目 次

序

例言

目次

第1章 調査経過

第1節 事業の経緯と文書記録	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	3

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地と地理的環境	6
第2節 周辺遺跡	8

第3章 調査

第1節 調査の概要

1 調査成果の概要	12
2 地区名・地点名・グリッド名	12

第2節 造構と遺物

1 第1号住居址	15
2 第2号住居址	18
3 第3号住居址	20
4 第4号住居址	23
5 第5号住居址	26
6 土 壤	28
7 溝 址	28
8 流路址	30
9 集 石	31
10 ピット群	31
11 その他の造構	31
12 造構外出土の遺物	31

第3節 まとめ

1 覆土中に多量の砾の投入のある住居址について	36
2 出出土器について	38

第4章 結 語

42

図 目 次

第1図 遺跡の分布と調査地の位置	4
第2図 調査範囲と周辺地形	5
第3図 地層断面	8
第4図 周辺遺跡	10
第5図 調査地全体図	13
第6図 第1号住居址	15
第7図 第1号住居址縹・遺物出土状態	16
第8図 第1号住居址出土土器(1)	17
第9図 第1号住居址出土土器(2)	18
第10図 第2号住居址	19
第11図 第3号住居址	20
第12図 第3号住居址縹・遺物出土状態	21
第13図 第3号住居址出土土器(1)	22
第14図 第3号住居址出土土器(2)・遺構外出土土器	23
第15図 第4号住居址	24
第16図 第4号住居址出土土器	25
第17図 第5号住居址	26
第18図 土壌	27
第19図 第2号・第3号溝址	29
第20図 流路址断面	30
第21図 集石	30
第22図 鉄器・土製品	32
第23図 第1号・第3号住居址出土食膳具土器組成	39
第24図 鉢形・塊形の土器	40

表 目 次

第1表 土壌一覧表	28
第2表 土器観察表	33
第3表 穴住居址内の縹群一覧	36

第1章 調査経過

第1節 事業の経緯と文書記録

- 昭和61年 8月29日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 12月23日 昭和62年度補助事業計画書提出。
- 昭和62年 4月 3日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 5月16日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 6月 1日 昭和62年度県営は場整備事業島内地区島内遺跡群埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 6月24日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 7月11日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 8月 5日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 9月 7日 昭和63年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 10月21日 島内遺跡群高松遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 12月14日 島内遺跡群高松遺跡埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。
- 12月19日 島内遺跡群高松遺跡埋蔵物の文化財認定通知。
- 12月21日 昭和63年度補助事業計画書提出。
- 昭和63年 4月 7日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 4月27日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 5月31日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 6月14日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 6月21日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月25日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 9月 6日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）計画変更承認申請書提出。
- 9月19日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出。
- 11月21日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定変更通知。
- 12月21日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定変更通知。

第2節 調査体制

1 昭和62年度（発掘作業・整理作業）

松本市教育委員会の直営事業として、以下の調査団を結成し行った。

調査団長	中島俊彦（松本市教育委員会教育長）
調査担当者	神沢昌二郎（松本市立考古博物館館長）
現場責任者	直井雅尚（社会教育課主事）
調査員	太田守夫（地質） 大久保知巳（考古） 土橋久子（考古）
事務局	浅輪幸市（社会教育課長）、小松亮（文化係長）、柳沢忠博（主査） 大村敏博（主査）、熊谷康治（主事）、洞田睦子
作業協力者	赤羽包子、浅輪真澄、石合英子、石川末四郎、岩坂善郎、岩野公子 大内清一、大出六郎、太田千尋、大塚袈裟六、開鳴八重子、 金子富人、神戸巖、小池直人、小松啓吾、瀬川長広、袖山勝美、 高山園子、高山淑三、高山守一、土橋久美子、鶴川登、土屋君子、 中島新嗣、中島治子、西川卓志、林昭雄、藤本嘉平、堀内福一、 牧垣とよ、丸山恵子、百瀬二三子、横山保子、若井孝夫

2 昭和63年度（整理作業）

前年同様に市教育委員会の直営事業として実施したが、特に調査団の編成はせず、以下のような体制で行った。

総括	神沢昌二郎（市立考古博物館長）
責任者	直井雅尚（社会教育課主事）
調査員	太田守夫、土橋久子、岩野公子
事務局	浅輪幸市（社会教育課長）、田口勝（文化係長）、熊谷康治（主査）、 降旗英明（主事）、山岸清治（事務員）、三沢利子

第3節 調査日誌

1 昭和62年度

昭和62年10月29日（木）晴

重機（パワーシャベル）による表土除去開始。発掘器材搬入。

11月5日（木）曇時々雨

重機による表土除去継続。人力による排土整理・遺構検出開始。

11月14日（土）曇

第1号・第3号住居址掘り下げ開始。いずれも覆土中に礫が多く苦労する。

11月17日（火）雨のち晴

第1号・第3号住居址掘り下げ継続。第4号住居址掘り下げ開始。

測量用の基準点を打つ。

11月18日（水）晴時々曇

第5号住居址掘り下げ開始。1/200全体図作成。

11月19日（木）晴時々曇

溝址・土壤掘り下げ開始。

11月21日（土）晴

流路址掘り下げ開始。

11月24日（火）晴

太田守夫調査員による地形地質の調査。

11月27日（金）晴

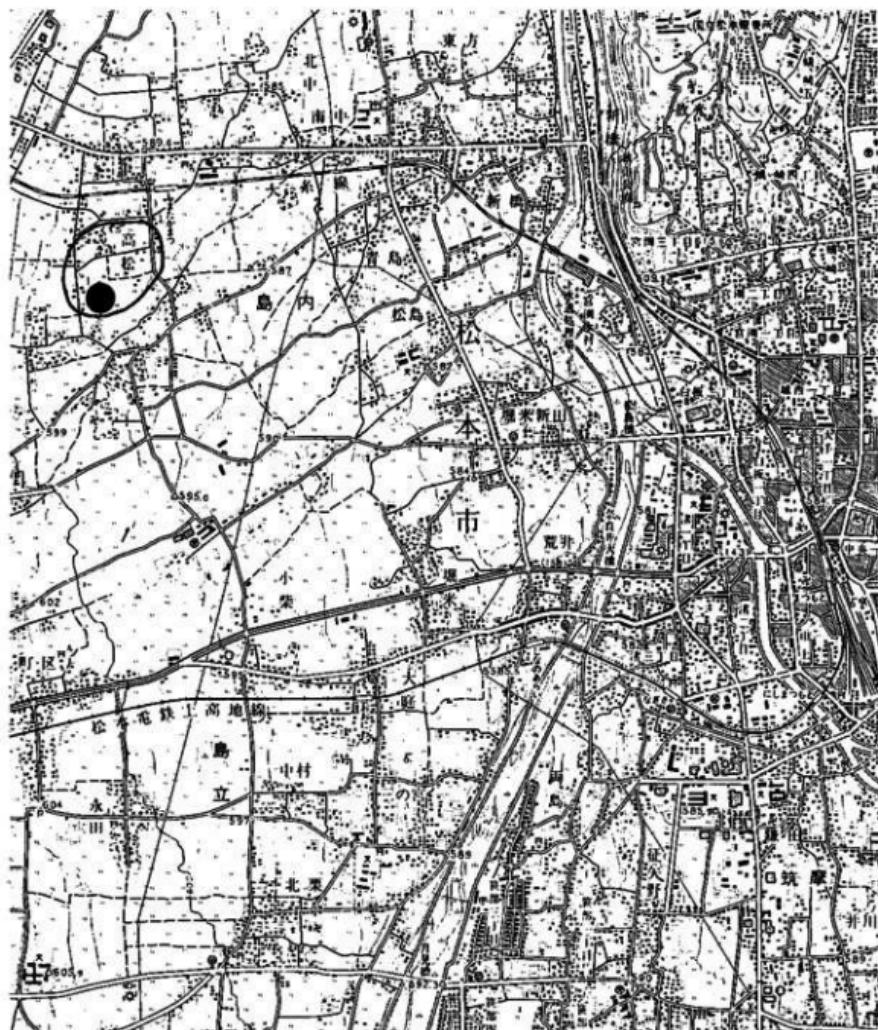
ほとんどの遺構が掘り上り、作業の人数をしばる。器材の撤収。

12月1日（火）晴

整理作業開始。



作業風景



● 調査地

1:25,000 松本

1000 0 800 1000 1200

第1図 遺跡の分布と調査地の位置



第2図 調査範囲と周辺地形

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地と地理的環境

1 遺跡の位置と周辺の地形

島内高松遺跡は、松本市島内高松の中央の水田域、海拔590mに位置している。地形上は梓川扇状地の氾濫原に当たり、遺跡は梓川の現河床の東方約1kmの距離にある。このうち現河床沿い750mは表土に乏しい砂礫河床（現在客土により開田されている）で、残り150mとの間に、地形面の形成期を分ける小段丘崖が存在する。この二つの地形面の形成については、すでに松本市文化財調査報告No.36・41・59⁽¹⁾にのべたので割愛するが、本遺跡は現河床・現河床に続く地形面より、一時期先に形成された、自然堤防状の地形面上にある。同じ地形面にのる上平瀬・北方・北中・南中遺跡等のなかでは、最も南端に位置する。自然堤防状地形面もこの付近から始まっている。この地形面の東縁の段丘崖は、本遺跡付近では遺跡の南東十数mの近距離にあり、高さは1~2mである。

自然堤防状の地形面は、傾斜8/1000・方向NE40~50、また地中に発見された旧河床の流れの方向はNE40~70で、いずれも南西-北東性を示し、梓川からの流れである。本遺跡の北東750mに当たる南中遺跡とは、段丘崖の近くにあること、土層の深度が60cmを越えるなど、状態がよく似ている。

2 遺跡の堆積層と疊

本遺跡の地形面は、自然堤防状の高まりで、堆積土層は一般に厚い。発掘の1地区・2地区および北隣りの試掘点での土層は70cm、場所によっては1mに達しているところもある。

堆積層は一般に上から表土（耕土、灰黒色、20~30cm）、斑鐵層（灰褐色~黃褐色、20~30cm、下部に鉄・マンガンの集積をみる）、砂質粘土（上層土より砂分が多い、褐色、20~30cm）、礫混じり土（円礫・砂・土、褐色、20cm (+)）からなっている（第3図）。

遺跡面は地表から60cm下で、住居址などはそれから30cmほど掘り下げられている。遺跡面あるいは遺跡面下には、方向NE40~70を示す砂礫層が存在し、厚い土層と平行し介在している。

1地区の発掘面（遺跡面）では、中央に5m幅の厚い土層と、その西側にそれぞれ1.5m前後の砂礫層が平行している。土層の厚さは地表から1mを越え、下部は砂質土から砂礫層に変わる。この土層中にNE50の方向を示す、幅約4.5m、深さ50cmの浅い溝状の堆積（流路址）が発見されている。溝状の埋積土は上から砂質土30cm、さらに砂分の多い砂質土20cmと、底部の砂・細礫からなり、

明らかに周辺の土層や砂礫層とは形式時代を異にしている。また溝内には土器片や割石のほか、西側に部分的であるが黒褐色の鉄分の集積が見られるため、遺跡と関係をもつ流れと考えられる。

砂礫層の礫はいずれも梓川系統で、礫種は硬砂岩を主とし、花崗岩・安山岩・チャート・砾岩・粘板岩・ホルンフェルスの円礫である。硬砂岩や花崗岩のなかには大礫（ $20 \times 10\text{cm} \sim 15 \times 10\text{cm}$ ）もあるが、大多数は中・小礫や細礫である。

住居址のカマドで利用された礫は、花崗岩と硬砂岩で、中心部に花崗岩を据えているのが目立つ。礫の大きさは、花崗岩は $50 \times 20 \cdot 30 \times 20 \cdot 15 \times 10\text{cm}$ の大礫で、硬砂岩はそれよりも小さく $20 \times 15 \cdot 15 \times 10\text{cm}$ である。

2 地区は、1 地区より 20cm ほど高い位置にあるが、これは1 地区の床下によるもので、もともとは同一地形面にあった。

2 地区の状態は1 地区と同様、発掘面の中央に土層を主とする地層と、両側に幅 1.5m 前後の砂礫層が、NE 70° の方向に平行して堆積している。土層の厚さは地表から 70cm で、下部は砂質土から砂礫層に変わる。遺跡面は地表から 60cm 下と考えられ、住居址は礫混じり土層を削って存在する。

中央の土層中に、方向 NE 70° ～NE 40° ～ 50° ～NE 60° と蛇行し、幅 $98 \sim 50 \sim 60 \sim 270 \sim 120\text{cm}$ 、深さ $10 \sim 15 \sim 20 \sim 5 \sim 15\text{cm}$ と変化する、溝状の堆積（第1号・第3号溝辻）が発見されている。溝の埋積土は周辺の土層より砂分が多く、流れとしては礫が余り運びこまれていない。埋積土中には土器片が見られている。礫は円礫で、上流部（西南）では個別に、下流部（北東）では層中あるいは底部に、数個から十数個と下流に向かって、次第に数を増し存在する。礫種は花崗岩と砂岩の小・細礫で、 $20 \times 15 \cdot 15 \times 10\text{cm}$ 大がわざかに含まれている。

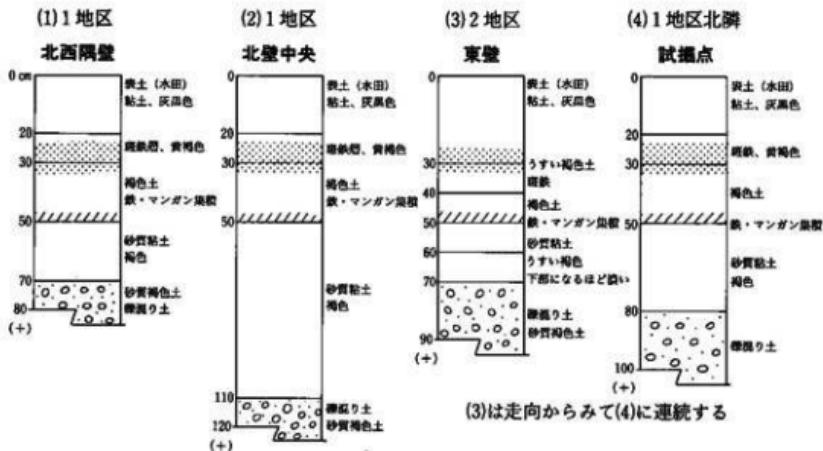
両側の砂礫層は、礫種礫径とも1 地区と同じで、梓川系統に属する。

3 遺跡の立地

本遺跡は、北方・北中・上平瀬・南中遺跡と同様、上層に厚い土層をもち、島内地区における最上の耕地となっている。発掘地は堆積層で見る限り、梓川のその後の氾濫は受けていない。かつての氾濫原が、後の河流によりその東側と西側とを、浸食されることによって、自然堤防状の地形面が形成されたものである。したがって遺跡面（発掘面）における堆積層は、かつての氾濫原の堆積物で、この場合土層と砂礫層は同時異相のものと考えられる。

遺跡と堆積層との前後関係は、住居址や溝状の跡が堆積層に切り込んでいることから、堆積層の形成が遺跡の成立より先だったと考えられる。

両地区に見られる溝状の跡は、地山の地層や埋積土からみて、上流から引水した用水溝と見て差し支えないであろう。（太田守夫）



第3図 地層断面

第2節 周辺遺跡

本遺跡の所在する松本市島内地区の大半は、東を奈良井川、北西を梓川によって画され、南は島立地区に続く平坦な地域で、本遺跡のほかにもいくつかの遺跡が点在する。立地は本遺跡と同様、梓川により形成され削り残された自然堤防状の微高地にあたっている。これらの遺跡を中心とした各地から平安時代の遺物の出土が報告されているが、その詳細は過去4回行われた同地区での松本市教委の発掘調査の報告⁽¹⁾その他⁽²⁾に詳しいので今回はそれらに譲り、ここでは市教委や歸長野県埋蔵文化財センターの発掘調査の成果を概観してみたい。

調査遺跡と調査年・調査主体を北のほうから列挙すると、以下のとおり。

上平瀬遺跡（S 60市教委）

北方遺跡（S 59・61市教委、S 61埋文セ）

北中遺跡（S 58・61市教委、S 61埋文セ）

南中遺跡（S 59市教委、S 60・61埋文セ）

高松遺跡（S 62市教委—今回）

1 上平瀬遺跡（第4図1）

調査面積3100m²のなかに、竪穴住居址2棟、掘立柱建物址2棟、墓址1基が発見された⁽¹⁾。遺構覆土および検出面等からの遺物の出土は非常に少なかったが、土器類から推察すると、平安時代前半の単時期のようだ。遺構の分布・遺物の散布の希薄な遺跡といえる。

2 北方遺跡（第4図2～4）

2回にわたる市教委調査分6600m²（第4図2・4）⁽²⁾、長野県埋蔵文化財センター調査分17230m²（同3）⁽³⁾、これらの調査地区はいずれも隣接しているが、総計で竪穴住居址55棟、掘立柱建物址16棟、竪穴状遺構11基等が発見されている。時期は平安時代の中頃から後半と中世である。島内地区では最大の調査規模と成果で、南西から北東方向に延びる微高地上に平安時代の集落が150m以上にわたって続いていることが判明した。

3 北中遺跡（第4図5～8）

市教委の1回目の調査は長野自動車道の東側を対象とし、島内小学校の北隣（第4図5）と、その西方（同6）に主な調査地点を設けたが、後者で近世の墓と堂址に関わると見られる集石が検出されたのみで、目覚ましい成果はなかった⁽⁴⁾。2回目の調査は長野自動車道の西側（同8）で、面積2800m²、平安時代から中世以降と考えられる竪穴住居址2棟、掘立柱建物址5棟、土壙38基等が発見された⁽⁵⁾。埋文センター分（同7）は調査面積12760m²で、同期の掘立柱建物址1棟、土壙約220基が調査されている⁽⁶⁾。これらから見ると、この遺跡は長野自動車道敷地内からその西側に以降の分布の中心がある、主に中世以降の遺跡といえよう。

4 南中遺跡（第4図9・10）

市教委調査分1300m²（第4図10）については、溝が9本、土壤状の落ち込み2基で、遺物は平安時代から中世の土器小片が少量出土したのみである⁽⁷⁾。一方埋文センター調査分（同9）は、13800m²の広さにわたるが、遺構・遺物ともに発見されなかった⁽⁸⁾。遺跡の中心からはずれていたのであろうが、遺構の分布の少ない平安時代以降の遺跡であることが推測される。

今回の高松遺跡の発掘調査では、島内地区で從来発見されていなかった奈良時代の竪穴住居址に当たったことが一つの大きな成果だったが、遺跡内における遺構の分布がかなり疎である点は上記の4遺跡にやはり共通するものであった。この遺構の密集度合いについてくらべるなら、島内地区に南隣する島立地区では、発掘調査面積4000m²で竪穴住居址20棟といえばかり分布がまばらな方⁽⁹⁾になることからも、うなずかざるをえない。前節で触れたように、頻繁な梓川の氾濫により、長期にわたって安定して人が住みつける場所が少なかったことを示すのであろう。55棟の竪穴住居



上平瀬道路 1 南中道路 9・10

北方道路 2～4 高松道路 11

北中道路 5～8

(1 : 15000)

第4図 周辺遺跡

址があった北方遺跡でさえ、平安時代の集落の南北と東の限界はほぼ捉えられており、他地区の同時期の集落より決して大きいとは言えない。発見された各遺構が多数の時期にわたって重複することがない点もこれを裏付ける。

このように、発掘が実施された島内地区平坦部の各遺跡の調査成果は、時代的には現在のところ遡っても奈良時代まで、ほとんどは平安時代、中には中世からのところもあり、遺構分布の密度も比較的薄いことを物語った。しかし、本格的な発掘調査がなされたのは遺跡と目されている範囲の一部に過ぎないところが多く、また時代的にも高松に後期の古墳が存在することもあって、上記の調査成果だけで島内地区平坦部の考古学的環境を言い切ることはできない。とはいえて梓川の氾濫の影響を受けており、古代においては人口の稠密な地帯ではなかったことは異論のないところであろう。むしろ同地区の近・現代の発展を見、古代から繰り返されたであろう治水と開墾の歴史に思い至るものがある。

註1 註10・4・8の文献

2 註3・6・7・9の各文献

3 藤沢宗平他 1973 「東筑摩郡・松本市・塙尻市誌」第二巻、歴史上

4 松本市教育委員会 1986 「松本市文化財調査報告No41 松本市島内遺跡群上平瀬遺跡」

5 註7・9の文献

6 長野県埋蔵文化財センター 1987 「長野県埋蔵文化財センター年報 3 1986」

7 松本市教育委員会 1984 「松本市文化財調査報告No31 松本市島内遺跡群」

8 松本市教育委員会 1988 「松本市文化財調査報告No59 松本市島内遺跡群北方遺跡II・北中遺跡」

9 註5文献および長野県埋蔵文化財センター 1988 「長野県埋蔵文化財センター年報 4 1987」

10 松本市教育委員会 1985 「松本市文化財調査報告No36 松本市島内遺跡群北方遺跡・南中遺跡」

11 註5文献および長野県埋蔵文化財センター 1986 「長野県埋蔵文化財センター年報 2 1985」

12 南糸遺跡の第3次調査 (松本市教育委員会 1986 「松本市文化財調査報告No38 松本市島立南糸遺跡」)に基づく数字。ここでは200mに既六住居は1棟の場合となるが、北方遺跡では市教委調査分だけでも287mに1棟、埋文センター分も合わせると433mに1棟となる。

第3章 調査

第1節 調査の概要

1 調査成果の概要

今回の調査で発見された、遺構・遺物は以下に記すとおりであった。

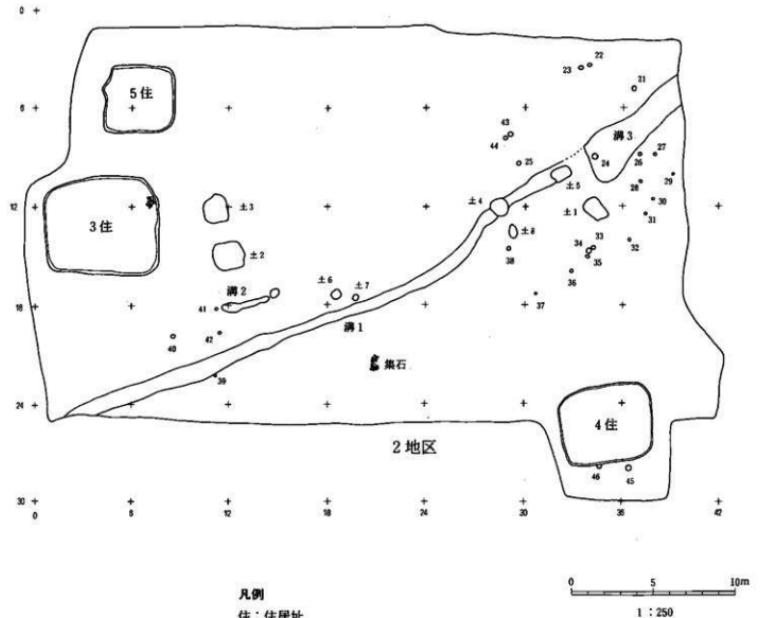
遺構には、竪穴住居址、土壙、溝址、集石、ピット群、流路址などがある。竪穴住居址（以下、単に「住居址」と示す）は1・2地区に分散して5棟発見されたが、第1号と第2号住居址には重複が見られる。第1号と第3号住居址の覆土には多量の礫が投入してあった。出土土器からみて第1号と第3号住居址が平安時代、第2号と第4号住居址が奈良時代に営まれたものと推定され、第5号住居址は出土土器がなく不明である。土壙は6基、溝址は3本で2地区に集中し、いずれも浅い。集石は規模の小さいものが2地区に1か所のみ、ピット群は直徑10cmに満たない小ピットが直線的に配列するもので1地区北側で1か所検出された。流路址は1地区中央部にあり、南西から北東方向に向かっている。住居址以外の遺構は出土する遺物が僅少ないしは皆無で、時期および性格がはつきりしないものがほとんどである。

遺物には、土器、土製品、鉄器がある。発掘面積にくらべて量が少なく、またそのほとんども特定の住居址から出土した。土器は出土遺物の9割以上を占めており、種別としては土師器・須恵器・灰釉陶器が見られる。土製品は土鍾2点、鉄器は刀子3点、器種不明2点である。

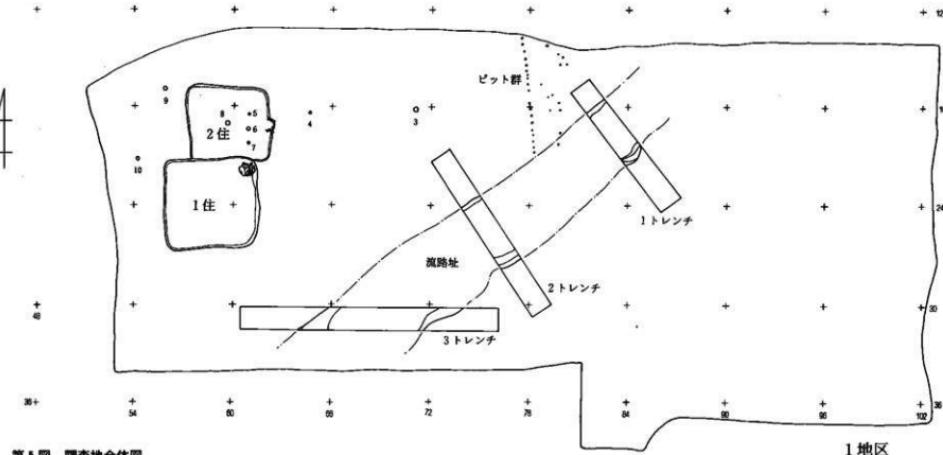
2 地区名・地点名・グリッド名

調査地はは場整備の工事の都合上、隣接する東西2つの地区に別れたため、東側の地区を「1地区」、西側を「2地区」と呼称する。調査面積は1地区：1122m²、2地区：974m²で、合計2096m²となつた。

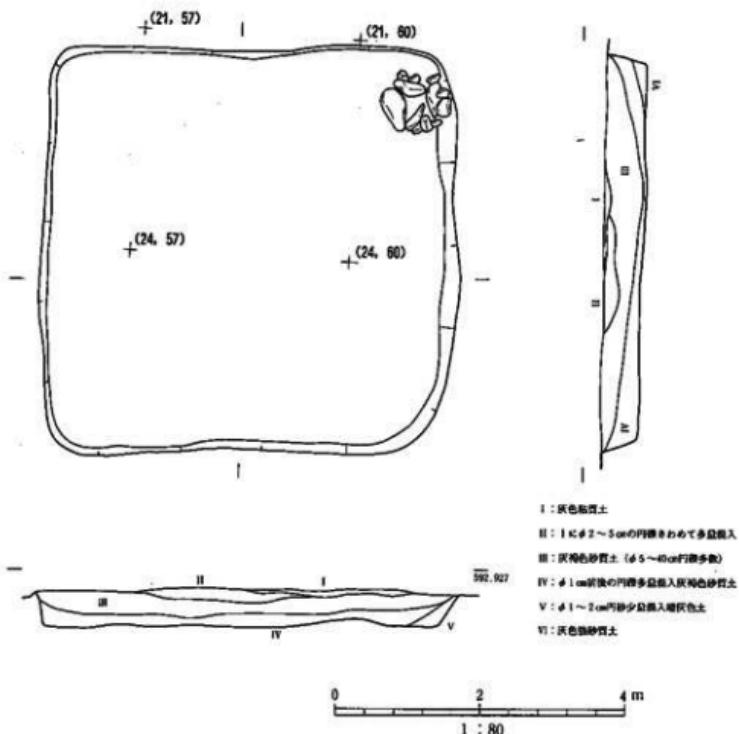
測量方法は基本的に造り方測量を用い、そのため両地区を共通して覆う3m方眼を東西、南北にそろえて設定し、北西隅を起点として東西軸、南北軸にそれぞれ起点からの距離を刻むことによって調査地内のすべての地点を同一の座標系のなかで捉えることができるようとした。座標名は（東西方向、南北方向）の数字で示し、3m方眼のグリッド名はそのグリッドの北東隅の座標名に「G」を付けて表した。例えば第3号住居址内の北東隅に近いところにある基準の座標名は(12, 6)、この座標名で示される(12, 6) G-グリッドは、第3号住居址の中にすっぽり入っているものである。



凡例
住：住居址
土：土壌
溝：溝址
数字のみはピット



第5図 調査地全体図



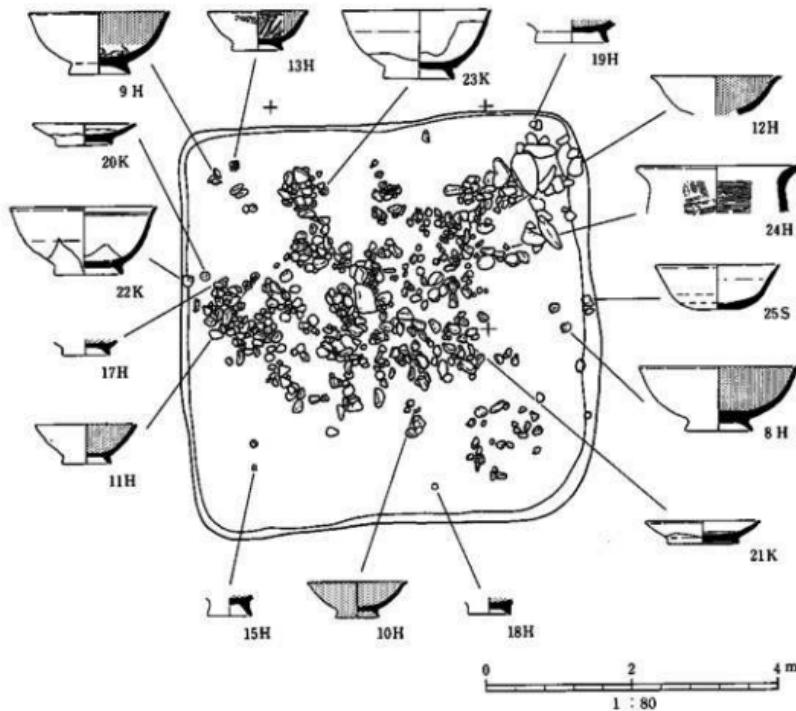
第6図 第1号住居址

第2節 遺構と遺物

1 第1号住居址

(1) 遺構 (第6図、図版3)

1地区西端、(21, 60) G～(24, 60) G周辺に位置し、第2号住居址と重複してその南端部を切る。平面形は、南北5.40m、東西5.84mの僅かに東西に長い隅丸長方形を呈す。壁は、壁高が北壁50cm、南壁46cm、東壁42cm、西壁39～43cmと比較的深く、掘り込みもしっかりしているが、南壁と東壁に幾つかの傾斜を有す。床は下層の地盤である礎混じりの砂質暗褐色土を堅く叩き締めてそのまま利用し、北に緩傾する概して平坦なものである。いったいに本址周辺の土質は径1～3cm程度



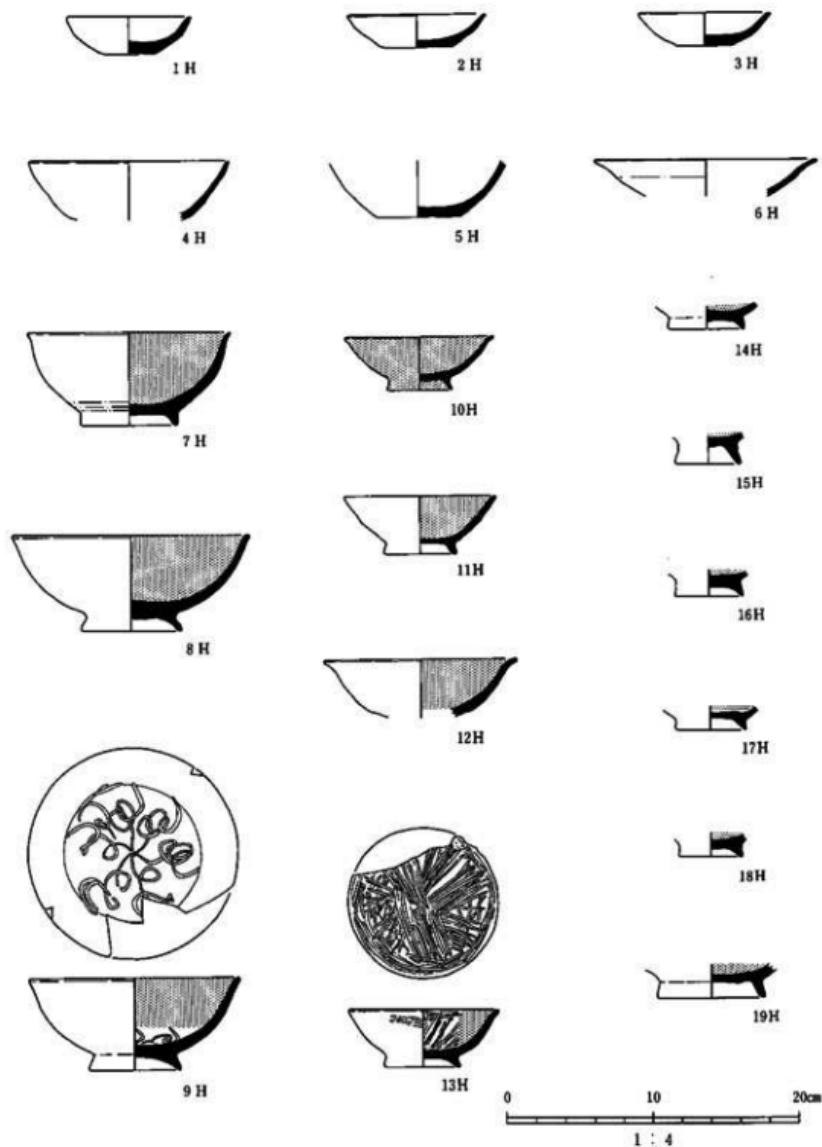
第7図 第1号住居址縄・遺物出土状態

の礫が混じる砂質土層であるが、所々に小規模な砂礫層を含んでおり、遺構はそれらを振り抜いているため床や壁面に多量の礫が露出している部分も見られる。カマドは、東壁の北隅に設けられて西に向かって開口している石組みのもので、側壁の石列や天井部の石などは良好な形で残存していた。しかし補強のために使われていたであろう粘土などは検出することができなかった。カマドの他には、本址に付随する施設の類は一切見つからなかった。床面積は28.56m²を測る。

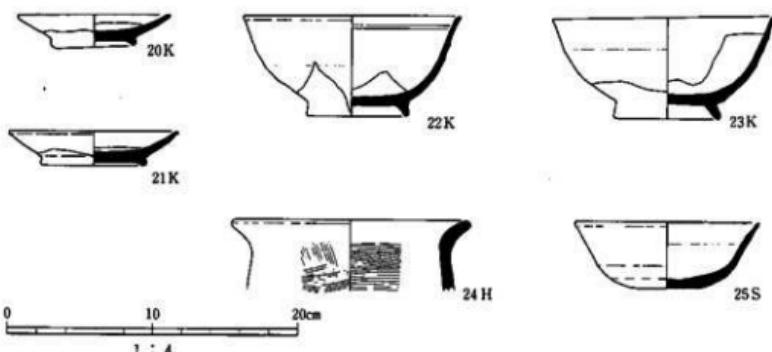
(2) 遺物等の出土状態 (第7図、図版4)

覆土中層から床上にかけて多数の礫が存在するという特徴があった。この礫は、径が5~20cm程度のものばかりが多数を占めるため、住居埋没時に自然に流入したのではなく、人為的な投入によるものと判断できた。水平分布はおおむね本址の中央部から一部がカマドの前面に及ぶ。垂直分布は北壁と西壁寄りがやや高く、中央へ向かって緩く傾斜しており、基本的に本址の覆土第III層のなかで捉えられる。

土器等の遺物は、まとまって廃棄・納置されたような状態のものはなく、また各個体の残存状況



第8図 第1号住居址出土土器(1)



第9図 第1号住居址出土土器(2)

も様々で、厳密な「一括遺物」とは認定できない。ただし残存度の高い個体の出土地点が本址の外周部に多く、層位的にも第IV層に伴うという共通性がある。

(3) 遺物（土器：第8・9図、土製品・鉄器：第22図、図版16～19）

多数の土器の他、土製品1点（土錘）、鉄器2点（刀子）が出土している。

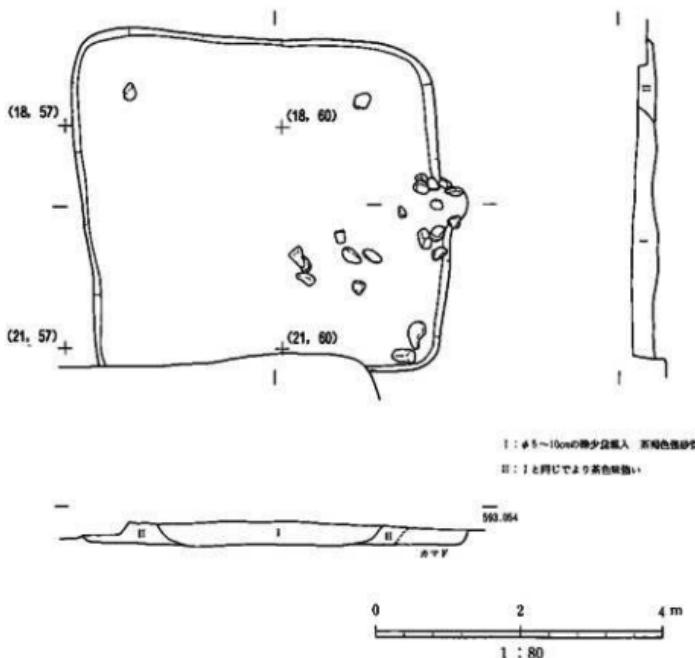
土器には、土師器・須恵器・灰釉陶器があり、食膳具の壺・塊類を中心に25点が図化・提示できた。第8・9図1～19・24が土師器（内黒土師器を含む）、同25が須恵器、同20～23が灰釉陶器である。主体となる食膳具を器種別に見ると、口径10cm以下・器高3cm以下の小形の壺（1～3）、口径が12cmを超える中形の壺（5・6・25）、口径10cmほどの小形の塊（10・11・13）、口径が14cmを超える大形で深い塊（7～9・22・23）、口径12cm以下の皿（20・21）、などの多様性がある。煮炊具は24の内外面にハケメがある小形で厚手の土師器壺1点のみ器形の復元ができた。これらの土器は一群として、本址の廃絶時期にはほぼ等しい年代観をもつと推定される。ただし24の土師器壺と25の須恵器壺の2点は、本址出土の他の土器に種別・製作技法上類似するものが全く無く、むしろ第4号住居址出土土器のなかに類例がいくつか求められるため、本址に切られる第2号住居址の廃絶に伴うものであって、本址埋没・埋め戻し時に偶然混入したと理解する。

2点の鉄器（第22図1・2）の内、1は刀子、2は刀部らしきものがあるので刀子と推定するが今一つはっきりしない。いずれも鋒が著しい上に破片で全形を知りえない。重量は1が11.5g、2が6.5gを計る。土錘（第22図7）は1/3程を欠いている。

2 第2号住居址

(1) 遺構（第10図、図版4・5）

1地区西端、(18, 60) Gの一帯に位置し、第1号住居址に南壁周辺を破壊される。平面形は、



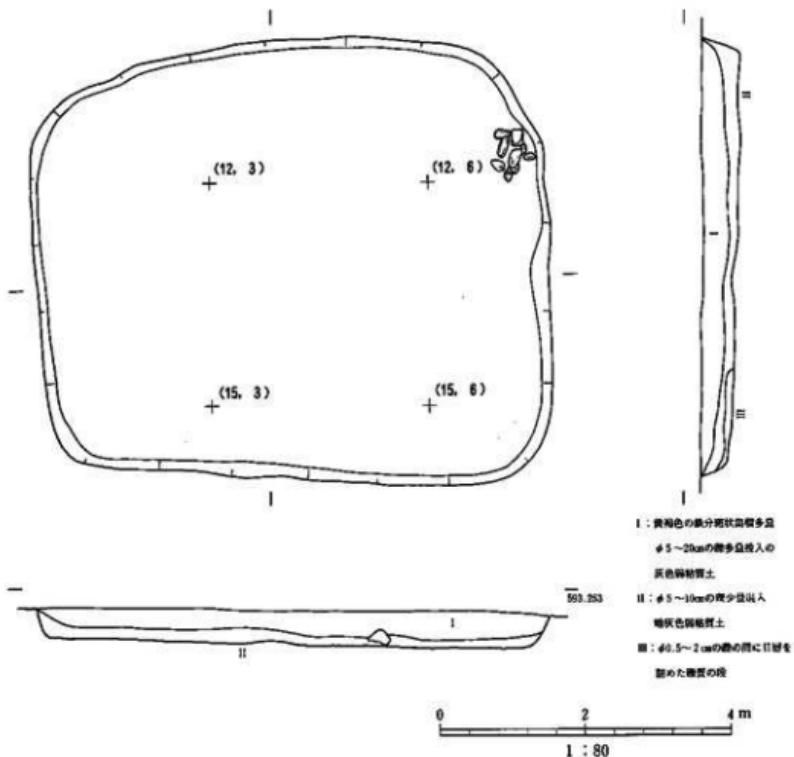
第10図 第2号住居址

南北4.54m・東西4.92~5.08mの僅かに東西方向が長い隅丸長方形を呈す。壁高は北壁10cm、南壁17~20cm、東壁14~16cm、西壁10~13cmと若干の異なりがあるが、これは床面に傾斜があるのでなく、検出作業の際、覆土の識別が非常に困難で壁周辺を削り込みすぎたためであって、本来の壁高はいずれも20cm近くあったと推定する。床面は、一般的に見ると平坦であるが、大部分が砂礫層中にあり、径10cmくらいの礫が各所に顔を出してデコボコしている。このため堅い感じは受けない。カマドは東壁の中央にあり外へ張り出している。石芯粘土カマドだったらしく、袖部の石材が並んでおり、火床の中央には支柱石が残っている。カマド以外に本址に伴う施設は発見できなかった。床面積は現況で 20.59m^2 、第1号住居址に破壊された部分も復元して推定すると 21.14m^2 である。

遺物等の出土状態については、径10cmくらいの礫が覆土上層に数点散らばっていたほかは、土器類も極めて少なく、特記することはない。

(2) 遺物（第22図、図版25）

非常に少なく、土器は土師器と須恵器の小破片が少量、鐵器で刀子とみられるものが1点カマド内から出土したにすぎない。重量は12.2g。図化・提示できたのはこの鐵器1点のみ（第22図3）



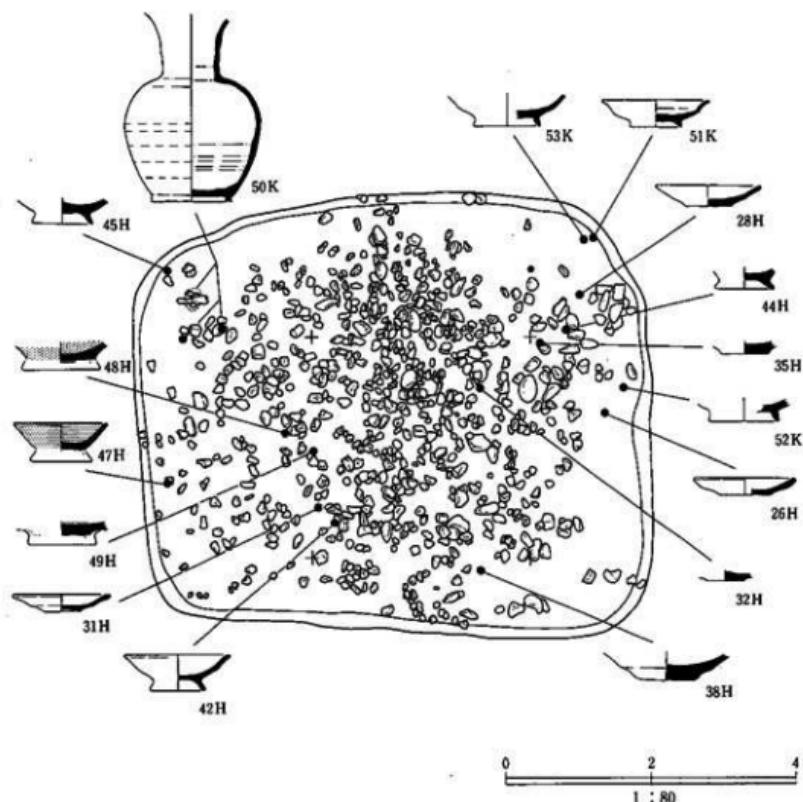
第11図 第3号住居址

である。ただし先述のように、第1号住居址出土土器の固化したもののなかに本址から紛れ込んだと推定されるもの（第9図24・25）が2点あった。

3 第3号住居址

(1) 遺構（第11図、図版6）

2地区西端、(12, 6) G一帯に位置する。平面形は、南北5.5~6m・東西7.12mの北辺が張る隅丸の不整な長方形を呈する。各壁はやや傾斜をもって掘り込まれており、北壁42cm、南壁36~38cm、東壁40~45cm、西壁33~38cmの高さを測る。床面は、概して平坦で、中央部の4m四方くらいには僅かに粘性のある黄灰色土を貼って叩き締めてある。しかし基本的に本址は、礫が多量に混入する砂質土や砂礫層に掘り込まれているため、床面の周辺部には大小の礫が露出している。カマドは東壁のかなり北寄りにかたまっている長径25cm前後の数個の石を以てその残骸と推定した。



第12図 第3号住居址縛・遺物出土状態

ただし焼土は見られない。カマド以外の本址に付随する施設は発見できなかった。本址は今回発見された住居址のなかでは最大規模をもち、床面積は 36.69m^2 を有する。

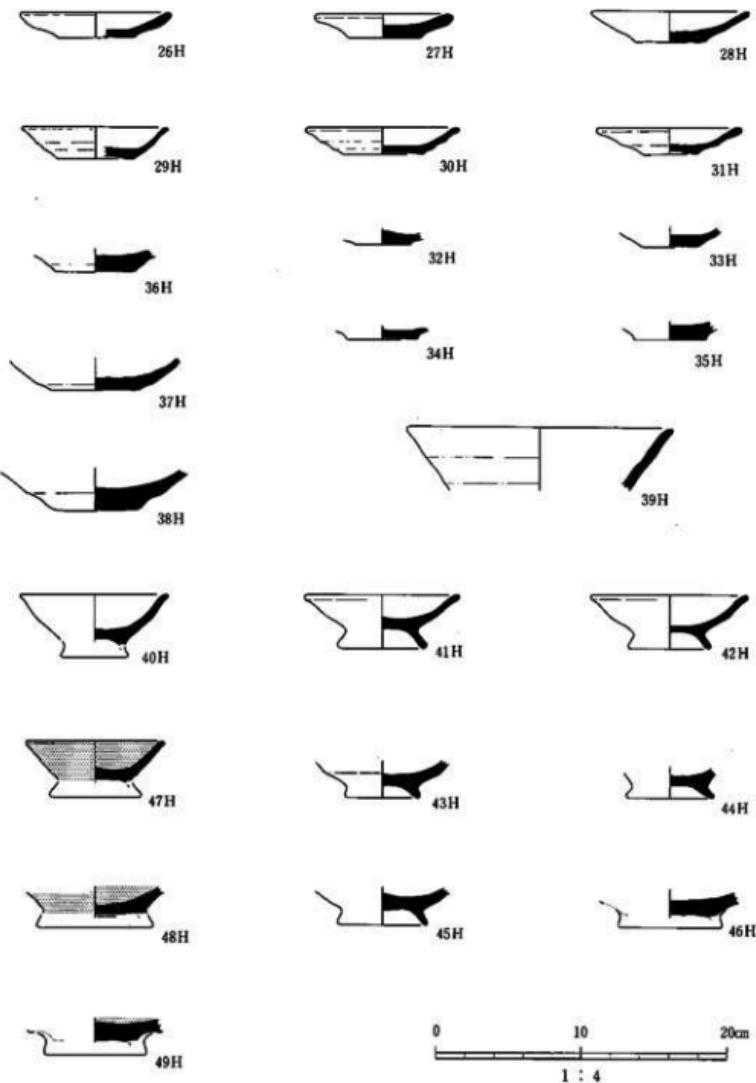
(2) 遺物等の出土状態（第12図、図版6・7）

第1号住居址と同様に、おそらく人為的に投入されたと考えられる縛が覆土中に多量に存在した。縛の径は5~20cmで、覆土中層から上層を占める第Ⅰ層に最も多く分布し、平面的には住居址外周部に少ないとほぼ全域にわたって広がっていた。

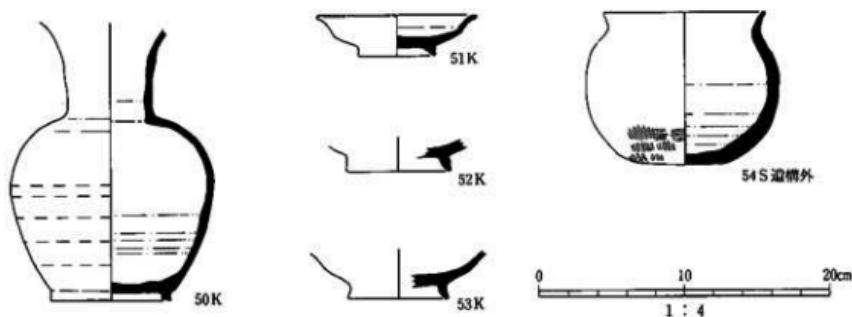
遺物はこの縛の下部や縛の分布の薄い外周部から主に出土し、中央部からは少ない。ただし一括で残されたような出土状態を示すものではなく、各個体の残存度にバラツキがあり、出土地点にも強い関連性は感じられなかった。

(3) 遺物（第13・14・22図、図版19~23）

多数の土器と、2点の鉄器が出土している。



第13図 第3号住居址出土土器（1）



第14図 第3号住居址出土土器(2)・遺構外出土土器

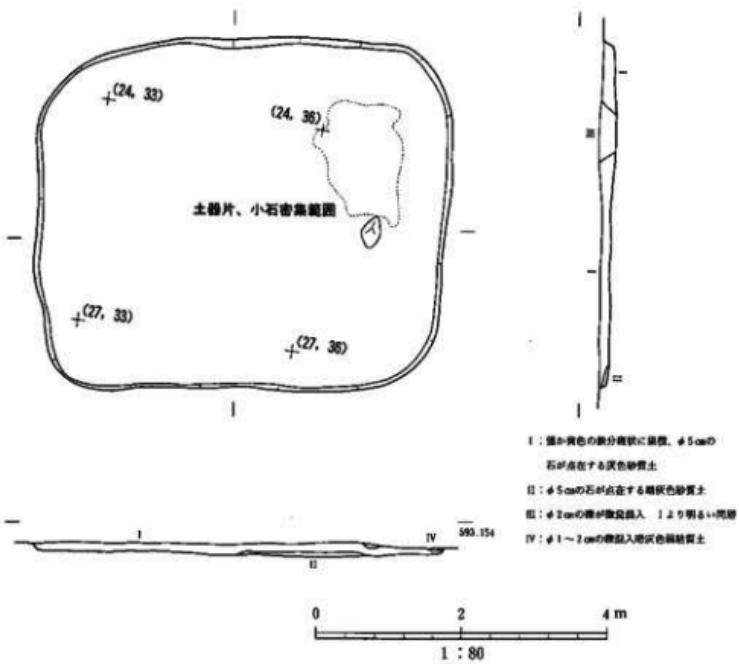
土器には土師器（黒色土師器を含む）と灰釉陶器があるが、量的にはほとんどを土師器が占める。28点が図化・提示できたが、第13図26~49が土師器、第14図50~53が灰釉陶器である。器種別に見ると、口径10cm前後・器高約2cmの小形の壺というよりは皿と呼ぶのがふさわしいもの（26~31、おそらく32~35もこの底部にあたると推定）、大形の壺（37~39）、口径10cm前後の小形の壺（40~45）、大形の壺（52・53、おそらく48・49も）、折縁皿（51）、長頸瓶（50）、等がある。これらの土器には異質な個体の混入はなく、一群として本址の廃絶時期を示すものと捉えてよからう。

鉄器（第22図4・5）はいずれも器種がわからない。重量は4が28.2g、5が10.4g。

4 第4号住居址

(1) 遺構（第15図、図版7）

2地区南東隅の調査地が南へ張り出す部分、(24, 36)G周辺に位置する。当初の計画によるとこの部分の調査地を張り出させる予定はなかったが、本址を検出した結果南半分が調査地外へ出てしまうことがわかったので、急遽、調査地の拡張を図ったものである。平面形は、南北4.72m、東西5.56~5.76mの東西に長い隅丸長方形を呈す。本来の掘り込みがかなり浅かったようで、壁は北側が最深の15cmで、他はいずれも10cm以下と低い。床面は、全般的には南西へ少々傾斜するが、径2~5cmの小礫を多量に含む土層中にあるため、至るところに礫が露出してかなりデコボコしており、堅さもない。カマドは、東壁の中央付近に僅かな土の高まりと焼土が見られ、その前方には長径30cmほどの礫が1個あることから、ここに構築されていたと考えられる。そのほかの施設は見当たらぬ。ただカマド推定地の北隣に、南北1.4m、東西1.2m位の範囲で、小礫が集まって若干床が高くなり、土器の小片が集中しているところがあった。本址の床面積は24.45m²を測る。



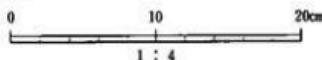
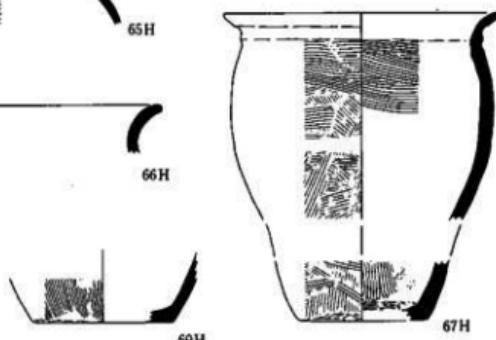
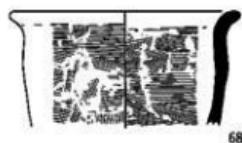
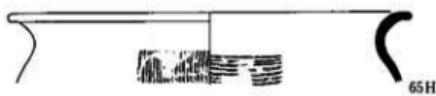
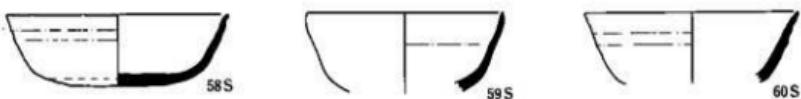
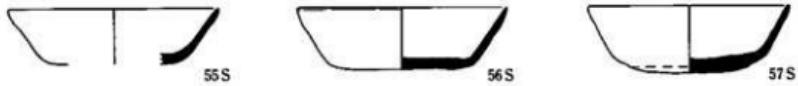
第15図 第4号住居址

(2) 遺物等の出土状態 (図版8)

礫は、地山のものよりは明らかに大きい、径5~10cmくらいのものが各所に点在していたが量は少なく、意図的に投入したような感じは受けなかった。土器も礫と同様であまりまとまりのある出方はしなかったが、前述のカマド北隣の一帯にはかなりの量が集中していた。とはいって、1個ないしは数個体の土器がその場で壊れて一括して遺存したような状態ではなく、様々な個体の小破片が集めてあったような感じで、後日、整理して接合復元を試みたが全形の1/3に達するものはなかった。

(3) 遺物 (第16図、図版23~24)

土器のみである。前述のとおりの出土状態で、細片も含めると量的にはかなり多い。17点を図化・提示できた。種別は土師器(第16図65~71)と須恵器(同55~63)、器種別に見ると、壺(55~61)、鉢(62~63)、小形の甕(67~69・71)、大形の甕(65・66・70)がある。壺と鉢は、形態や製作手法はほとんど変わらないが、口縁端部の僅かな内湾や外反に着目して鉢を壺から分離した。61の壺の底面にはヘラ記号が見られる。本址出土土器の大きな特徴は、食膳具の壺・鉢はすべて須恵器であるのに対して、煮炊具の甕は逆にすべて土師器となっている点にある。須恵器の壺・



第16図 第4号住居址出土土器

鉢は底面調整がすべてヘラ切りないしヘラケズリで、糸切りのものはない。土師器の變もいずれもやや厚手でハケメをもち、どちらにも異質な個体が混入している要素はない。したがって、本址出土の土器は一群として捉え、本址の廃絶の前後の年代を示す資料として扱ってよいと考える。

5 第5号住居址

(1) 遺構 (第17図、図版9)

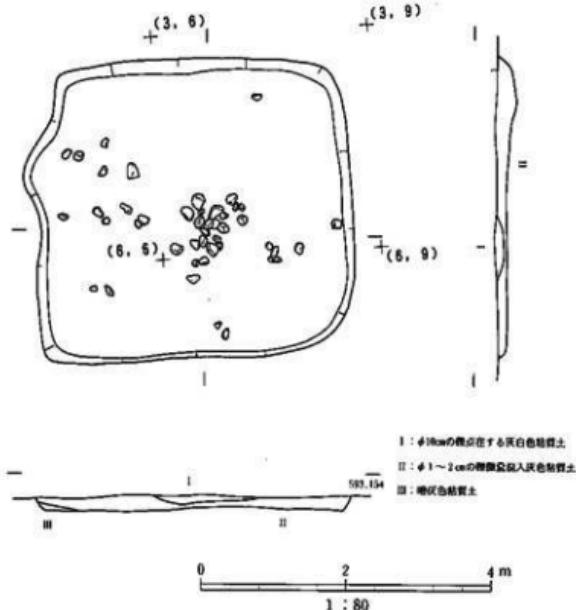
2地区の西端部、(3, 9)G周辺に位置する。これは第3号住居址の3mほど北にある。平面形は、南北4.10m、東西4.30~4.40mのはば隅九方形を呈すが、西壁の中央部北寄りに張り出しがある。各壁はやや傾斜を有しており、壁高は、北壁20~25cm、南壁11~20cm、東壁17cm、西壁13~16cmを測る。床は南から北へ向かってわずかに傾斜しているが、ほとんど凹凸はない。しかし堅さも全く感じられず、床とするよりは底面というのがふさわしい。住居に伴う施設はカマドも柱穴も何もない。床面積は、15.23m²である。

遺物等の出土状態については、径15cm前後の礫が、本址の中央部を中心に東西壁の前方にかけ、床より10cm以上浮いて少数散布していたことの他は、記するものはない。本址は床面がしっかりとし

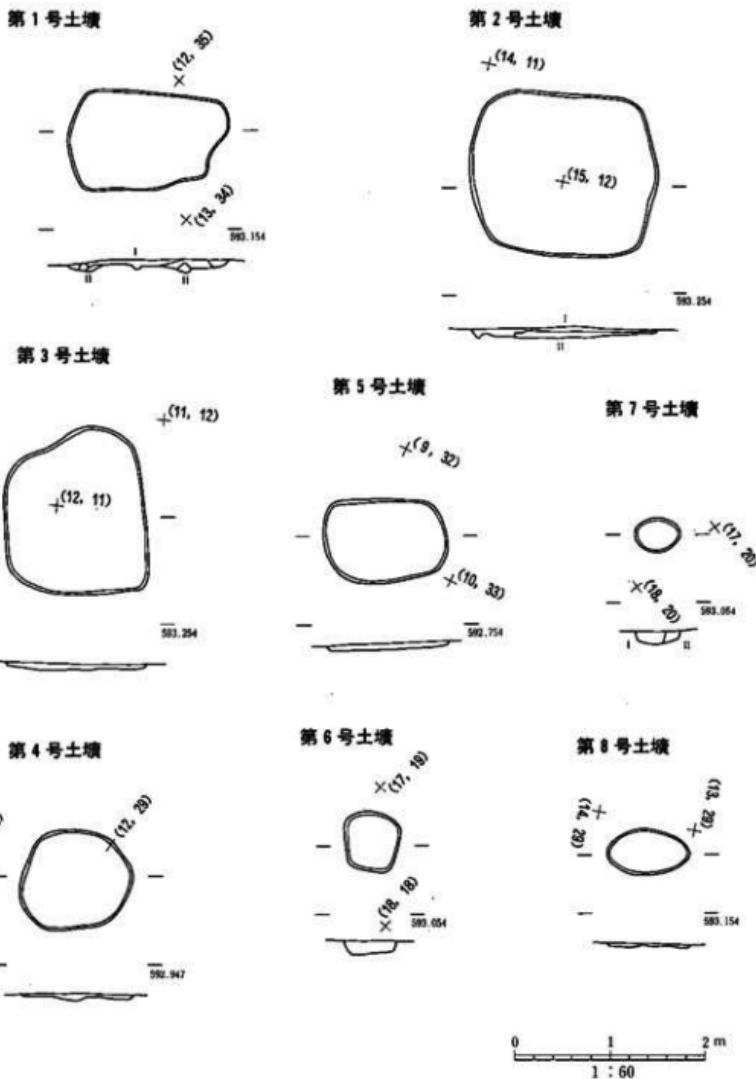
ない点、カマド等の施設がない点から考えると、竪穴住居址として扱うのは適切ではないかもしれない。

(2) 遺物

覆土中から土師器と見られる土器の小片が1点出土したのみである。



第17図 第5号住居址



第18図 土壌

6 土壌 (第18図、図版9~12)

溝が約50cm以上の穴を土壌として扱った。総数で8基ある。いずれも浅く、掘り込みのしっかりしないものであった。平面形が整った形のものは少なく、長方形を基調とするもの(第1号・第5号)、方形を基調とするもの(第2号・第3号・第6号)、横円(第7号・第8号)など様々で、規模も、最大は第2号の196×164cmから最小の第7号の48×34cmまでバラツキがある。覆土はいずれも灰色~暗灰色系の砂質土であった。遺物は第5号に土師器質の土器片があったのみで、小片のため詳細は不明。いずれの土壌も残存状態が悪く性格を推定することは難しいが、位置などから第2号・第3号は第3号住居址ないしは第5号住居址に、またその他は第1号溝址に関連する可能性が考えられる。

第1表 土壌一覧表

土 壤 №	1	2	3	4	5	6	7	8
位 置	(9~12.32) G	(12.5~13) G	(9~12.12) G	(9~12.30) G	(9.33) G	(15.21) G	(15.21) G	(12.30) G
平 面 形	不整長方形	隅丸方形	不整方形	円形	隅丸長方形	不整方形	横円形	横円形
規 模	164·102·6	196·164·12	174·146·10	116·102·4	130·86·5	60·58·12	48·34·12	86·48·3
土 層	I:灰色砂質土 II:褐色砂質土 III:褐色砂質土	I:褐色砂質土 II:1層より厚い 砂質土	褐色白色砂質土	暗灰色砂質土	皮を含む灰褐色 砂質土	褐色~2cm薄少 量褐色砂質土	I:灰白色砂質土 II:褐色白色土 III:褐色砂質土	黄色帶びる暗灰 色砂質土
そ の 他	標2点	標1点		第1号溝址を切 る	土器片あり			

「G」はグリッド 「規模」は長径・短径・深さの順。単位はcm

7 溝址 (第5~19図、図版13)

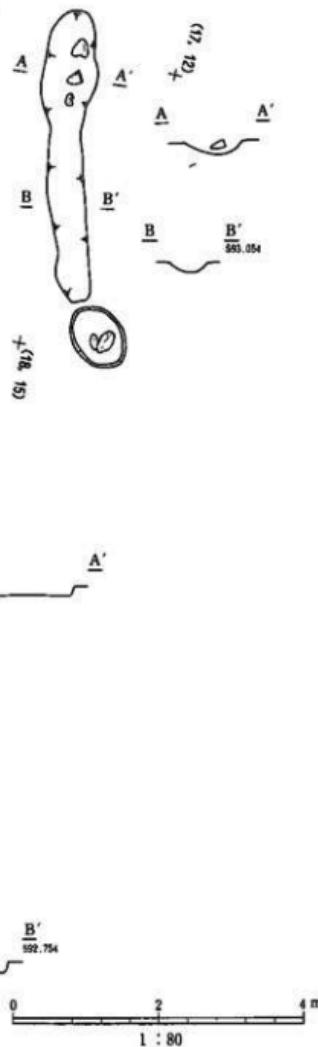
第1~3号までの3本が発見された。いずれも2地区に存在する。

第1号溝址は、2地区の南西の隅から始まり、(9, 33) G付近まで南西から北東に向かい斜めに2地区を横断するように走っている。長さは約34m、幅は太いところで1.0m、狭いところでも0.6mと比較的均一で、深さは11~19cmと浅い。断面は船底形を呈し、壁の傾斜は緩くグラグラしている。土層は僅かに青味のかかる灰色砂質土の単層で、最下部に若干の砂がある部分もあった。水路だったのだろう。

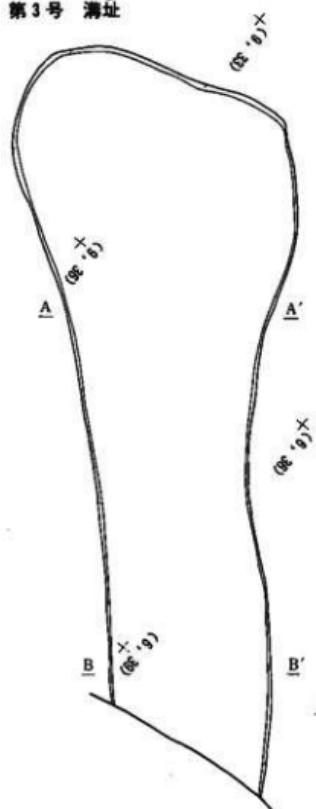
第2号溝址は、2地区(15, 15) Gにあり、西南西から東北東に向かう。長さ3m、幅34~46cmを測る規模の小さいもので、深さも10cm前後と浅い。断面は船底形で土層は僅かに砂質の灰色土の単層である。西側に径15cmほどの礫が3個かたまっていた他に遺物はない。

第3号溝址は、第2号の北東の続き、(3~9, 36~39) Gに位置する。第2号が途切れ2.4mくらい先から始まるので一連のものかとも考えたが、幅が1.6~2.8mとかなり広くなっているので別遺構として扱った。2地区東北隅の地区外へ延びており長さは不明、深さは10~15cmで、底面は東北方向に向かって緩く傾斜する。土層は第1号と同じ。

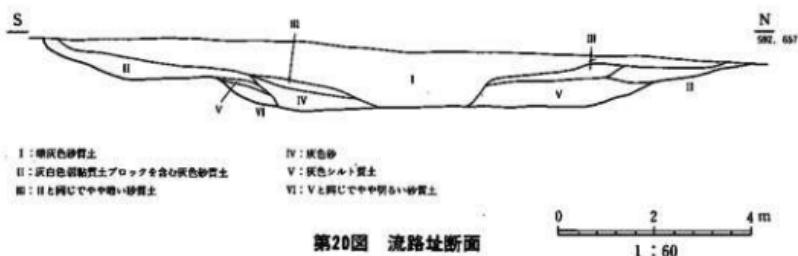
第2号 溝址



第3号 溝址



第19圖 第2号・第3号溝址



8 流路址 (第20図、図版14・15)

1 地区中央部を南西から北東にむかって横切るように (30, 69) G周辺から (15, 87) G周辺にかけて存在する。他の遺構と同一の検出面では非常にわかりにくく、1~3のトレンチを設定し検出面を1段下げることでラインをつかむことができた。幅は、1段下げた面で4~5mを測るが断面観察の結果ではもっと上層からあることが判明しており、そこでの幅は、推定で7m前後に達するものと見られる。深さは1段下げた面からは最大で40cmほどだが、上段からだと60~70cmを測る。土層は6層に分けられるがいずれも砂質やシルト質で、中央のⅠ層の最下面には部分的に少量の砂礫が見え流路であったことが窺えた。3本のトレンチの結果を総合すると、底面。

の標高は北西に行くほど低くなってしまっておりその方向に流れがあったと考えられる。遺物は土師器と須恵器の磨滅した小片が数点出土した。第2・4号住居址に近い時期に存在していた遺構の可能性がある。



第21図 集石

9 集石（第21図、図版12）

2地区（21、21）Gにある。長径1.1m、短径0.6m程の南北に長い楕円の範囲内に径10~20cmの亜円礫が、他の遺構と同一の検出面上に、あまり重複することなく集められていた。下部に掘り込み等は全く無かったが、北部2/3程の範囲には礫の間に細かい炭粒が多量にあった。遺物はない。本址の性格は不明だが、住居址や溝址より時期が下る遺構で、もう少し上層から掘り込まれていた可能性もある。

10 ピット群（第5図、図版15）

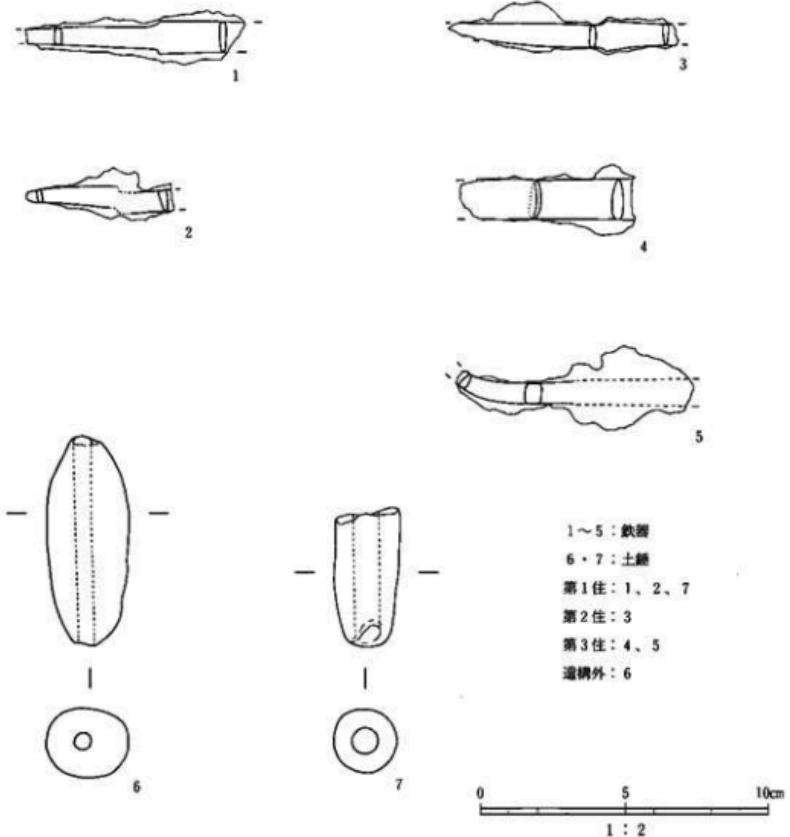
1地区の（15、78）Gから（18、81）Gにある。径7~10cm、深さ15cm前後の円形の小ピットが、ほぼ南北方向（N-S-W）に一列に19個並び、その東側にやはり同様の小ピットが不規則に11個散在する遺構で、一列に並ぶものはそのまま北の調査区域外に続いている。列部分のピット間の距離は、南半部では25~35cmとそろっているが、北半部に行くとバラツキが大きくなる。ピットの覆土には一様に粘質の暗灰色土が詰まっていた。出土遺物はなく遺構の性格は不明だが、覆土が粘性からみてかなり新しいものである可能性もある。

11 その他の遺構（第5図）

径が20~30cmくらいのピットが40個ほど、若干のまとまりをもって点在する。それは第2号住居址の上面、第3号溝址の南、第1号溝址の西部などだが、それぞれ建物址や柱列になるような配置は見られず、各ピットに柱痕もなかった。

12 遺構外出土の遺物（第14・22図）

検出面やその上部の包含層から少量の遺物が出土している。ほとんどは磨滅した土師器・須恵器の小片で、その分布も希薄なものであった。そのなかでも（18,21）Gの周辺には若干のまとまりが見られ、後述の土錘もここから出土した。第1号溝址の中央部南、集石の北にあたり、これらの遺構に関連した散布かもしれない。図化提示できたのは第14図54の須恵器の壺と、第22図6の土錘の2点のみである。第14図54の壺は、（9,21）Gから単独に出土したもので、口径11.1cm、器高10.4cmの小形品ながら、胴部外面下半とそれに続く底面にはタタキ痕がある。全体の1/4を欠くのみの一括品なので、調査時にはこれが伴う遺構があるのでないかと出土土地周辺を精査したが、それらしいものは全く見つからなかった。第2号・第4号住居址出土土器に近い時期のものと考えられる。



第22図 鉄器・土製品

第2表 土器觀察表

No.	出土 場所	種類	器 形	寸 法	成 形・調整・形態の特徴				備 考	実測 番号	注 記	
					口唇	底盤	腹壁	外 壁				
1	1住 土師	壺DII	8.4	3.8	2.4	(完)	直	短	高	ロクロナデ、底面回転糸切り	1-3	高松 1住フク土下ソウ
2	1住 土師	壺DII	9.4	5.0	2.1	1/2	短	短	高	ロクロナデ、底面回転糸切り	1-5	高松 1住フク土下ソウ
3	1住 土師	壺DII	8.8	3.8	2.2	(完)	短	短	高	ロクロナデ、底面回転糸切り	1-7	高松 1住北東フク土
4	1住 土師	壺DII	13.6	5.6	1/5	短	短	高	ロクロナデ、底面回転糸切り	1-6	高松 1住北東フク土	
5	1住 土師	壺DII	15.2	6.4	1/3	短	短	高	ロクロナデ、底面回転糸切り	1-4	高松 1住フク土下ソウ	
6	1住 土師	壺 A	13.6	6.4	6.3	(3/4)	仄	短	黑	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面底盤斜状ミガキ・黑色處理 黒	1-18	高松 1住北東面
7	1住 土師	壺 A	13.6	6.4	6.4	(完)	短	短	黑	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面ミガキ・黑色處理 黒	1-17	高松 1住北東面
8	1住 土師	壺 A	14.3	6.2	6.2	3/4	深	短	黑	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面ミガキ・黑色處理 黒	1-21	高松 1住北東フク土
9	1住 土師	壺 C	10.1	4.4	3.7	(2/3)	短	短	黑	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面ミガキ・黑色處理 黒	1-16	高松 1住北東フク土
10	1住 土師	壺 A	10.4	5.0	3.9	(完)	短	短	黑	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面ミガキ・黑色處理 黒	1-19	高松 1住北東フク土
11	1住 土師	壺 A	13.2	5.4	3.9	(完)	短	短	黑	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面ミガキ・黑色處理 黒	1-15	高松 1住No.5
12	1住 土師	壺 A	10.3	5.4	3.9	(完)	短	短	黑	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面ミガキ・黑色處理 黒	1-20	高松 1住No.9
13	1住 土師	壺 A	5.2	4.0	2.0	(完)	短	短	黑	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面ミガキ・黑色處理 黒	1-13	高松 1住北東フク土
14	1住 土師	壺 A	4.5	3.5	1.8	(完)	短	短	黑	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面ミガキ・黑色處理 黒	1-14	高松 1住No.18
15	1住 土師	壺 A	4.6	3.5	1.8	(完)	短	短	黑	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面ミガキ・黑色處理 黒	1-11	高松 1住北東フク土
16	1住 土師	壺 A	4.8	3.5	1.8	(完)	短	短	黑	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面ミガキ・黑色處理 黒	1-12	高松 1住No.13
17	1住 土師	壺 A	4.4	3.0	1.5	(完)	短	短	黑	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面ミガキ・黑色處理 黒	1-10	高松 1住No.1
18	1住 土師	壺 A	7.4	3.0	1.5	(完)	短	短	黑	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面ミガキ・黑色處理 黒	1-9	高松 1住No.4
19	1住 土師	壺 A	10.6	5.6	2.2	(完)	仄	短	白	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台	1-23	高松 1住No.16
20	1住 土師	壺 A	11.6	7.2	2.3	(完)	短	短	白	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台	1-24	高松 1住No.15
21	1住 土師	壺 A	14.9	7.0	6.7	(完)	仄	短	白	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面ミガキ・黑色處理 白	1-1	高松 1住No.15
22	1住 土師	壺 A	15.2	7.2	6.9	(完)	仄	短	白	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面ミガキ・黑色處理 白	1-25	高松 1住No.8
23	1住 土師	壺 A	15.9	6.4	4.5	(完)	仄	短	白	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面ミガキ・黑色處理 白	1-8	高松 1住No.4
24	1住 土師	壺 B	12.6	4.4	2.0	(完)	仄	短	青	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面ミガキ・黑色處理 青	1-25	高松 1住No.27
25	1住 土師	壺 B	10.4	5.7	1.8	(完)	短	短	赤	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台	3-4	高松 3住北東フク土
26	3住 土師	壺 DII	9.6	5.0	1.7	(完)	明素	赤	明素	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面底盤斜状ミガキ・黑色處理 赤	3-9	高松 3住北東フク土
27	3住 土師	壺 DII	10.8	4.8	2.2	光	明素	短	赤	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面底盤斜状ミガキ・黑色處理 赤	3-13	高松 3住No.9
28	3住 土師	壺 DII	10.1	5.2	2.2	1/2	仄	短	赤	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面底盤斜状ミガキ・黑色處理 赤	3-1	高松 3住北東フク土下ソウ
29	3住 土師	壺 DII	10.6	5.6	1.8	2/3	仄	短	赤	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面底盤斜状ミガキ・黑色處理 赤	3-5	高松 3住北西
30	3住 土師	壺 DII	10.0	3.7	1.8	(完)	明素	赤	明素	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面底盤斜状ミガキ・黑色處理 赤	3-2	高松 3住北西
31	3住 土師	壺 DII	3.8	—	—	(完)	明素	赤	明素	ロクロナデ、底面回転糸切り後ツケ高台・内面底盤斜状ミガキ・黑色處理 赤	3-8	高松 3住No.5

No.	出土 地点	種別	器形	口径 底径	寸法	口径 底径 盤高 足	外 面	内 面	経年変 遷部	成形・調整・形態の特徴	備 考	実測 番号	注 記
33 3住 土鍋	平DIII			3.6	(完)	薄 実 火 鉢	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	周	ロクロナデ、底面回転糸切り後一部ナデ		3-7	高松 3住北西フク土
34 3住 土鍋	平DIII			4.8	(完)	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	周	ロクロナデ、底面回転糸切り		3-3	高松 3住北西フク土
35 3住 土鍋	平DII			4.9	(完)	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	周	ロクロナデ、底面回転糸切り		3-6	高松 3住No.6
36 3住 土鍋	HDII			5.5	(1/2)	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	周	ロクロナデ、底面回転糸切り		3-10	高松 3住北東フク土下層
37 3住 土鍋	HDII			6.0	(完)	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	周	ロクロナデ、底面回転糸切り		3-12	高松 3住北西フク土
38 3住 土鍋	HDII			6.4	(完)	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	周	ロクロナデ、底面回転糸切り		3-13	高松 3住No.3
39 3住 土鍋	火			7.8	1/6	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	周	ロクロナデ		3-24	高松 3住南東フク土下層
40 3住 土鍋	火			10.1	1/6	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	周	ロクロナデ、底面シケ高台		3-18	高松 3住所道
41 3住 土鍋	火			10.6	6.0	3.7	2/3	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	ロクロナデ、底面シケ高台		3-19	高松 3住ベルト内
42 3住 土鍋	火			10.7	5.6	3.7	(完)	明 化 實 火 鉢	明 化 實 火 鉢	ロクロナデ、底面シケ高台		3-20	高松 3住No.19
43 3住 土鍋	火			5.2	1/2	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	周	ロクロナデ、底面シケ高台		3-23	高松 3住北西下層
44 3住 土鍋	火			6.0	1/4	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	周	ロクロナデ、底面シケ高台		3-17	高松 3住No.6
45 3住 土鍋	火			6.2	(完)	揭 一 脚	揭 一 脚	揭 一 脚	周	ロクロナデ、底面シケ高台		3-16	高松 3住No.16
46 3住 土鍋	火				(1/2)	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	薄 實 火 鉢	周	ロクロナデ、底面シケ高台	高台削除	3-14	高松 3住北東フク土
47 3住 土鍋	火	C		9.4	1/2	黑	黑	黑	周	ロクロナデ、底面シケ高台		3-21	高松 3住No.23
48 3住 土鍋	火	C			(1/4)	黒	黒	黒	周	ロクロナデ、底面回転糸切り後フタ合合、内付蓋:ガキ・黒色地墨	高台削除	3-22	高松 3住No.24
49 3住 土鍋	火	A			(完)	白	白	白	周	ロクロナデ、底面シケ高台	高台削除	3-15	高松 3住No.17
50 3住 灰物	長脚灰			8.3	(完)	白	白	白	周	ロクロナデ、底面回転糸切り後フタ合合、内付蓋:ガキ・黒色地墨	高台削除	3-14	高松 3住No.14・15・21
51 3住 灰物	三			11.0	5.4	2.8	1/3	灰	白	ロクロナデ、底面回転糸切り後フタ合合	袖付研磨、底面朱墨	3-C	高松 3住No.11
52 3住 灰物	四			7.2			(1/3)	灰	白	ロクロナデ、底面回転糸切り後フタ合合	底面朱墨	3-B	高松 3住No.22
53 3住 灰物	四			6.9			(1/3)	灰	白	ロクロナデ、底面回転糸切り後フタ合合	底面朱墨	3-A	高松 3住No.10
54 4住 灰物	壺			11.1	5.9	10.4	1/3	糊	糊	ロクロナデ、断脚外曲丁半、底面タタキ	内面底化物付施	3-E	柱記なし(検出面)
55 4住 灰物	壺	B		14.5			1/6	灰	灰	ロクロナデ、底面ヘラ切り後ナデ		4-18	高松 4住No.1
56 4住 灰物	壺	B		14.4	10.9	4.2	1/3	淡 實 火 鉢	白	ロクロナデ、底面ヘラ切り後ナデ	胎土や火被付	4-13	高松 4住No.2・3
57 4住 灰物	壺	B		13.8	8.2	4.5	1/2	糊	糊	ロクロナデ、底面ヘラ切り後ナデ	ヘラ配号	4-17	高松 4住No.4
58 4住 灰物	壺	B		15.2	6.5	4.9	(1/3)	淡 實 火 鉢	白	ロクロナデ、底面ヘラ切り	燃成不透敷質	4-11	高松 4住No.5
59 4住 灰物	壺	B		13.6			2/3	黄	白	ロクロナデ	燃成不透敷質	4-12	高松 4住No.2
60 4住 灰物	壺	B		14.6			1/8	淡 實 火 鉢	白	ロクロナデ	燃成不透敷質	4-10	高松 4住上面
61 4住 灰物	壺	B		13.6	10.0	4.9	(1/2)	灰	白	ロクロナデ、底面ヘラ切り後ナデ		4-13	高松 4住土器集中
62 4住 灰物	鉢			14.4	4.6	5.2	(完)	糊	灰	ロクロナデ、底面回転蓋ズリ、口輪端部強化に外反		4-15	高松 4住北東フク土
63 4住 灰物	鉢			15.8	7.9	6.0	(2/3)	糊	灰	ロクロナデ、底面ヘラ切り後ナデ、口輪端部強化に外反		4-14	高松 4住土器集中
64 4住 土鍋	火	A		22.2			1/6	黄	白	脚部外表面ハゲメ、底面強化ハゲメ		4-1	高松 4住No.3
65 4住 土鍋	火	A		29.8			1/8	白	周	周	周	4-2	高松 4住南西フク土

No.	出土 地点	種別	器 形	寸 法	口 深	底 径	器 高	口 併 底 部	外 面	内 面	成形・調整・形態の特徴	備 考	実測 番号	注 記
66	4 住	土師 壺	A	34.0	1/6	縦	縦	断面部外側縫合ヶメ、口縫部ヨコナデ	断面等しい	4 - 3	高松 4 住 No. 6			
67	4 住	土師 小形壺	18.8	8.9	21.2	1/6	朱刷・質滑	断部上半内付直縫ハケノ、下半横ハケノ、口縫部ヨコナデ	断高は推定	4 - 7	高松 4 住 No. 7			
68	4 住	土師 小形壺	15.8			1/3	質滑・灰褐色	断部外側下半縫ハケノ、上半内付縫ハケノ、口縫部ヨコナデ	口縫部に炭化物	4 - 4	高松 4 住 No. 2			
69	4 住	土師 壺	9.6		(1/8)	灰	質	断部外側縫合ヶメ、底面ハケノ	内面等しい	4 - 5	高松 4 住 北西フク土			
70	4 住	土師 壺	11.0		(1/3)	灰	茶	断部外側縫合ヶメ、内面ナダ、底面木製压痕		4 - 8	高松 4 住 土器集中			
71	4 住	土師 壺	9.0		(2/5)	茶	褐	断部外側縫合ヶメ、内面擦ハケノ、底面木製压痕		4 - 9	高松 4 住 北東フク土			

第3節まとめ

1 覆土中に多量の礫の投入のある住居址について

今回発見された第1号および第3号住居址の覆土中には、非常に多量の礫が存在したが、これについて若干考えを巡らしてみたい。

礫群は住居覆土のほとんどを覆い、特に第3号住居址にあってはほぼ全面にわたって礫が詰まっているという状態であった。この礫群は、住居使用時になんらかの形で生活に使っていたものでも、また住居構築に利用していたものではなく、さらに住居廃絶後に自然の営力によって流入したものでも恐らくないであろう。即ち人為の産物であり、住居廃絶時またはその後に投入された礫と考えざるをえない。

近年、松本市内の発掘調査で奈良・平安時代の竪穴住居址について同様の事例がいくつか目につくようになったので、簡単な集成を行って、この礫群の類型とその性格を見ることとする。第3表がその集成である⁽¹⁾。ここでは報告で住居内に「礫群の投入がある」「集石がある」とされたものを扱ったが、規模の著しく小さいものや、単にカマドの構築材が住居内に崩れ込んでいるだけと見られる様なものは除外した。

第3表 竪穴住居址内の礫群一覧

遺跡名	住居名	住居の規模 (m)	時期	基 石 の 状 態					類 型	文 献
				位 置	層 位	範囲・疏密	礫径	数		
島立条里的遺構	1	3.8×3.5	X I	中央部	上層～床	僅約1m	礁	20~80	10数個	B b III
*	3	3.6×3.8	I X	中央部一帯	上層～床 大 礁など有	約2m角	礁	10~60	80数個	B b III
*	6	4.4×5.1	X-XI	中央部や西	中層～床	1.8×1.5m	密	10~20	90数個	B b I
*	8	2.9×2.6	X I	中央から南半分	中層～底 物を押す	約1.5m径 やや密	礁	10~20	80数個	B a I
*	11	3.5×3.4	X I	カマド前から南半分	上～中層	1.2×2.2m	密	20~60	50数個	B b III
*	12	5.2×5.1	IV	ほぼ全面	中層～上層 と比較	5×4.6m	密	10~20	大量	A a I
北東	20	—×5.4	XII-XIII	カマド前から東半部	上層から底面	1.9×1.0m やや密	礁	20~50	50数個	B b II
*	23	4.0×4.3	X	中央部	上～中層	2.7m往	礁	30~50	30数個	B b II
*	30	3.5×3.4	IX	中央北寄り	中層	3.5m往	礁	20~50	30数個	B a II
南東	4	6.0×6.0	X	カマド前一帯	中層	2.4×1.0m	礁	20~50	30数個	B a II
くまのかわ	1	3.7×3.8	X	中央から南寄り一帯	中層	1.5×2.7m	礁	20~50	50数個	B a II
北方	18	3.9×4.8	X	①西半部、②南 東部の2か所	下層底2.0 2~3m往	0.1~2.0m 2m往	礁 やや密	10~40 10~50	40数個 30数個	B a II B a II
*	21	6.1×7.0	X	①中央から西 カマド前の2か所	中～下層	0.3×2.1m 0.6×1.8m	やや密 礁	10~80 10~40	多量 80数個	B b III B b II
高松	1	5.4×5.8	XII-XIII	中央からカマド全面	中層	3.8×4.4m	密	5~40	多量	B a II 今回
*	3	6.0×7.1	XIII~	ほぼ全面	上～中層	5.6×6.0m	密	5~20	大量	A b I 今回

礫群の状態を第3表の項目別で観察すると以下のような姿が浮かび上がる。

住居址内での平面的な位置

大別して住居址内のほぼ全面に広がるものと、部分的なものの2者がある。特に後者は中央部一帯にあるものが多く、東西や南北、あるいはカマド側へ寄っている例もあるが、極端に壁際とか隅のことではない。このことは、部分的な礫群が基本的に埋没や埋め戻しと同列に近い存在であることを示唆すると考える。前者をA型、後者をB型と仮称する。

層位・深さ

ほぼ一定の層位・深さに存在するものと、上下の広がりの大きいものがある。上下の広がりが大きいものは、その全体に層的厚みがあるのではなくて、たいていは礫群の中心にむかって深くなっている。前者をa型、後者をb型と仮称する。

礫の大きさ

どの礫群にも径が10~20cmの比較的小さな礫は共通して含まれるが、大きさの上限ではかなり違ったが目立ってくる。ここに着目すると、礫径が10~20cmの比較的小さなもののみで構成される礫群、大きな礫の上限が50cm位までのもの、それを越えるもの、の3類型が指摘でき、それぞれI・II・III型と仮称する。

礫の分布範囲・密度と礫の数

第3表の『礫の数』の項目は10個単位で礫の概数を数えたもので、100個を超えるものを『多量』、それと同じ位の密度で全面に礫が広がっているものを『大量』と表記してある。礫の範囲と密度・礫の数は相関関係にあり、ここでは礫群のなかに狭い範囲に密集して礫があるものと、礫の数に比して広く、密度が『疎』となっているものがあることがわかる。

第3表中の礫群の類型は上記の分類を組み合わせ、例えばB b III型というように示す。

次にこの礫群の形成の原因をいくつか推定・列举し、上記の実像と照らし合わせて、無理があるものから消去を試みたい。

A：人為的に形成された可能性

- ①当該竪穴を廃棄し新たに竪穴を掘る際に地山から掘り出された大小の礫を投棄した（礫捨場）。
- ②廃棄した竪穴に、カマドその他の施設・用具の材料として礫を溜めた（礫溜め）、またはそれらに利用・加工したあとの残り・残欠の礫を投棄した。
- ③住居を廃棄・埋没させる際に何らかの精神的な理由で礫を投入した。

B：意図的ではない形成の可能性

- ①住居の構築材として用いてあったものが残った。
- ②住居内の施設（カマド等）の構築材として用いられていたものが崩れて残った。

C：自然の営力により形成された可能性

①豎穴の自然堆積時に洪水等で運ばれてきた。

②豎穴の周囲上部包含層が砂礫層でそこにあった礫が自然に堆積した。

まず C だが、洪水等による形成の可能性については、ふるい分けの悪い砂礫や砂利を伴わない点から否定できる。また上部包含層の礫の可能性についても、礫の周囲に砂礫や砂利を伴うはずであるから、同様に否定される。次に B だが、住居内の施設の構築材として用いたものとすれば、部分的な礫群はもう少し壁際とか隅に集中しているものがあつてもよさそうで、その点から疑問視される。住居自体の構築材に用いたものなら、いずれの礫群も住居のかなり高い部分で使われていたと考えざるをえず、しかも、礫の大きさのバラツキが著しい礫群（II・III型）については問題が残るであろう。A については否定する材料は少ないが、他の豎穴を掘る際の礫捨て場とするとその周辺の砂礫層にはとうてい含まれないような大礫をもつ例（II・III型）が問題となり、逆に加工用の礫溜めだと礫の大きさにバラツキの少ない例（I型）が支障となる。しかしここでは礫群形成の原因として最も可能性の高いものとして A を考えておきたい。

2 出土土器について

最初に断っておきたいが、土器観察表の「器形」欄に示した器種の細かい分類は、〔松本市教委 1988『島立条里的遺構』〕に準拠したものなので詳細はそちらを参考にしていただきたい。ただしこの分類は、今回調査の第1号・第3号住居址出土土器群より古い様相をもつもののための分類だったので、以下で触れる2軒の住居址の土器の実情には合っていない部分が多くある。それについては類似の資料の今少しの増加を待って、別の機会に改めたい。

(1) 第1号住居址出土土器

食膳具が中心で、器種組成は、大きくわけて高台を持たず底面に糸切り痕を残す壺と、高台をもつ壺により構成され、若干の皿が伴う。焼物の種別では土師器と灰釉陶器の2種があり、壺は土師器のみ、皿は灰釉陶器のみ、壺（碗）は灰釉陶器と土師器で作られ、焼物の種別と器種の間に対応関係があることがわかる。

細かく見ると、各器種のなかでさらに2種類の寸法に分かれているものがある。壺は、口径10cm・器高2.5cm未満の小さいものと、口径が13cmくらいの大きなものの2種類。壺（碗）は、口径10cm・器高4cm未満の小さいものと、口径13cm・器高6cm以上の大きくゆったりと深めのものの2種類が見られる。これをまとめると、第23図の上段に示す組み合わせが本址出土の食膳具の代表的なものといえる。11世紀代の資料と言えよう。

成形・調整等の製作技法については、土師器の壺類が例外なく内面にミガキと黒色処理が施されているのにたいし、壺類は内外面にクロナデの痕跡を明瞭に残してそれ以上の調整が行われていない点が特徴的である。小形の壺のなかにはミガキ・黒色処理を外面にまで及ぼしたもの（10・13）も見られる。また壺のミガキには暗文を意図したと考えられるもの（9・13）がある。

尚、6は塊として捉えているが、内面にミガキが見られないこと、器形が異なることから全く別の器種として扱うほうが妥当であろう⁽⁴⁾。

(2) 第3号住居址出土土器

第1号住居址出土土器群と類似する点が多い。即ち、食膳具を中心であること、器種は壺・塊を中心に皿も見られること、焼物の種別が壺は土師器、塊（碗）は土師器と灰釉陶器、皿は灰釉陶器と明確に区分されること、等である。一方、若干ではあるが相違点も目に付く。壺と塊は寸法がやはり2種類あるようだが、塊は大きいもので全形のよくわかるものが多く、壺の大きいものは第1住のものより口径が大きくなるようで、はたして第1住出土の壺と同様の寸法の分化といってよいのか疑問が残る。また、壺の小さいものは第1住のそれより口径は増すが器高が低くなつて、ほとんど皿といったほうがよいような外形を呈している。27のように厚い器肉の、明らかに他とは異なる個体も混じっていて、これを一緒に扱うのは問題かもしれない。塊の小さいものも体部の湾曲の滑らかさが失われて、僅かな稜をもちながら外傾度合いを増しているように見える。

成形・調整等の技法については、壺類がロクロナデの痕跡を明瞭に残してそれ以上の調整がなされていないことは第1住と同じだが、塊は内面あるいは内外面ミガキ黑色処理のものがある一方、外面はもちろん内面からもミガキが失われてロクロナデ痕を残すだけのものも少なからずある。塊におけるこの現象は、製作上の手法の省略という型式変化を示すものと理解したい。従って小形の塊を介して見るなら、第1住土器群に対し第3住土器群は若干の時間差をもった新しいものということになる。前述の小形の壺の器高の低いことも、同一器種（形式）の時間差による扁平化という型式変化で説明できる（第23図下段）。

	土師器					灰釉陶器	
	壺(小)	壺(大)	塊?	塊(小)	塊(大)	皿(大)	皿
1住							
3住							

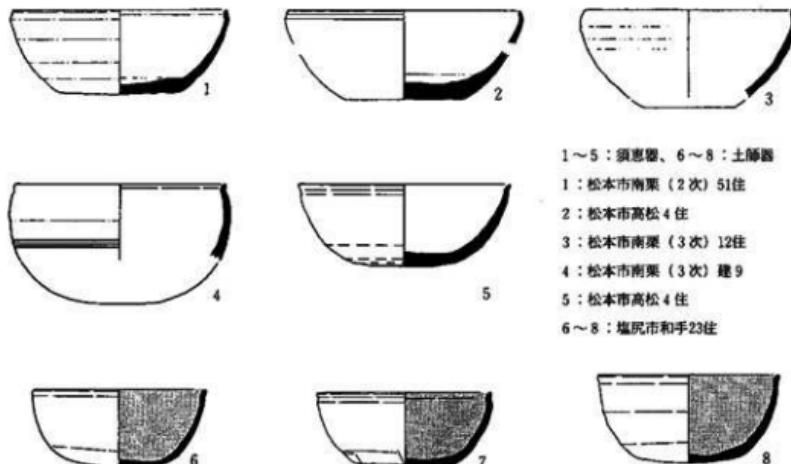
第23図 第1号・第3号住居址出土食膳具土器組成

(3) 第4号住居址出土土器

食膳具がすべて須恵器である点が大きな特徴である。器種は壺と鉢で、壺はいずれも高台を持たず、底面にヘラ切りないしヘラケズリ痕を残す。寸法も口径14cm前後とほぼそろっている。これらの須恵器壺は、型的には底面に回転糸切り痕を残すものに先行し、本址出土土器の相対年代を示す好資料といえる。鉢についてはあまり一般的な器種の呼称ではなく、また製作技法等も壺と大差ないが、口縁端部に僅かな変化があり、体部もかなり丸味を意識して作られているため敢えて分離した(第24図参照)。金属製の鉢等を模倣したもので壺とは基本的に系譜が異なる、と考えたからである⁽⁵⁾。

煮炊具の甕は、全形のわかるものはないが、他の例から推定すると長胴形になる。口縁部が強く外反し、基本的に内外面にハケメをもっている。底部片の70から見ると、底部が厚く突出する古墳時代後期の甕とは異なって、胴部下端が内湾気味に収束して底部に至る。これを新しい要素とし、胴部内面のハケメを古い要素と捉え、本址出土の甕は古墳時代的な様相と平安的なそれの中間に位置するものと考えたい。

本址出土土器は総体として、組成に土師器の食膳具を欠き、須恵器の壺は底面糸切りの出現以前の様相で、有台の壺は量が少なく図化できるものがないという、非常に顕著な特徴を示す。この組成に近い他例を松本市内の調査に探ると、南栗1次6住⁽⁶⁾・17住⁽⁷⁾、同2次11住⁽⁸⁾、同3次1住・3~5住⁽⁹⁾、高畠2住⁽¹⁰⁾、の出土土器が平行ないしは僅かに遡る様相を示し⁽¹¹⁾、秋葉原1号墳・2号墳⁽¹²⁾、前田木下6住⁽¹³⁾、南栗2次6住、が後続する資料になる⁽¹⁴⁾と考える。相対年代は、既存の編年案に對比させると島立III期⁽¹⁵⁾、松本平奈良・平安(II期)5・6段階⁽¹⁶⁾、にあたり、8世紀の前半に位置付けられている。



第24図 鉢形・壺形の土器 (1:4)

- 註1 「文献」欄の数字は参考文献の番号に対応
- 2 参考文献14
- 3 むしろ参考文献2の分類が合致する。
- 4 原 明芳氏が参考文献1・2の中で「盤B」という名称で置あるいは碗から分離・分類しているものに等しいと考える。
- 5 かつて参考文献4及び10の3章3節で同一の指摘をしたことがある。
- 6 参考文献8
- 7 参考文献9
- 8 参考文献10
- 9 参考文献12
- 10 併出している土器器表が本誌のそれより古相を示す。あるいは須恵器環がより箱形に近い。等が僅かに遡る可能性である。
- 11 参考文献6
- 12 参考文献7
- 13 伏需原例は須恵器の环が、台のないものより有台が圧倒的に多い。前田木下例は須恵器の台のない环底面に系切りが出現し始めている。これらは本例より新しい要素と見る。
- 14 この編年表（というより時期区分）は参考文献9で掲載され、参考文献10・11・14を経て訂正・補強されている。
- 15 この時期区分は、参考文献3及びシンポジウム『信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相』（1987.11.7-8 長野県考古学会）の討論結果による。8世紀前半のさらに前葉に位置付けられている。

参考文献

- 1 原 明芳 1987 「松本平における平安時代の食器・其の2」39-4
- 2 原 明芳 1988 「吉田向井遺跡-5 成果と課題」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』2 長野県教育委員会・越後野県埋蔵文化財センター
- 3 原 明芳・直井雅尚 1987 「松本平における様相」『長野県考古学会誌』55・56長野県考古学会
- 4 直井雅尚 1988 「松本平における内燃式プロト土器器の出現と展開」『信濃』40-4
- 5 松本市教育委員会 1982 「松本市文化財調査報告No24 松本市篠原くまのかわ遺跡」
- 6 松本市教育委員会 1983 「松本市文化財調査報告No26 松本市新村秋葉原遺跡」
- 7 松本市教育委員会 1984 「松本市文化財調査報告No30 松本市前田木下遺跡」
- 8 松本市教育委員会 1984 「松本市文化財調査報告No32 松本市島立南高遺跡」
- 9 松本市教育委員会 1985 「松本市文化財調査報告No35 松本市島立南高・北高遺跡、高橋中学校遺跡、条里的遺構」
- 10 松本市教育委員会 1986 「松本市文化財調査報告No38 松本市島立南東遺跡」
- 11 松本市教育委員会 1987 「松本市文化財調査報告No48 松本市島立北高遺跡、条里的遺構」
- 12 松本市教育委員会 1987 「松本市文化財調査報告No51 松本市高橋遺跡」
- 13 松本市教育委員会 1988 「松本市文化財調査報告No59 松本市島内遺跡群北方遺跡Ⅰ・北中遺跡」
- 14 松本市教育委員会 1988 「松本市文化財調査報告No63 松本市島立条里的遺構」

第4章 結 語

高松遺跡は、松本市島内地区の平坦地に広がる島内遺跡群の南西端をなす、梓川により形成された自然堤防上の地形に立地する遺跡である。以前から土器・陶器類や古銭を出土して周知の埋蔵文化財包蔵地として知られていたところでもある。この遺跡一帯に、折から進行中であった県営は場整備事業が及ぶことが、松本地方事務所から告げられたのが昭和61年の8月であった。その後、担当機関の間で何度か当該文化財保護のための協議が進められ、発掘調査を実施することになった。

発掘調査の実施にあたっては、遺跡に含まれると考えられている範囲はかなり広くそのすべてに調査のメスを入れることは不可能であったので、以前に遺物出土のあったと言われている地点の周辺で、しかも自然堤防状の微高地の南縁に絞って今回の調査地を設定した。一帯の土層が深く、遺構面まで工事の破壊が及ぶ部分が少ないのであろうという推定がそれを助けた。はたして発掘調査を開始し、パワーシャベルによって遺構面までの土の除去を進めると、目指す土層までは60cm以上の深度があり、排土の量が著しく、工程の予定変更を余儀なくされたのであった。

発掘調査の結果は本書第3章に述べたとおりだが、このなかでまず第一に挙げなければならない成果は、奈良時代（8世紀代）に遡る住居址の発見であろう。島内地区的平坦部では、これまでの発掘調査で発見された住居址は最も古いものでも9世紀代であり、この発見により当地区の開拓がさらに遡ることの動かぬ証拠をつかんだといえる。平安時代後半11世紀代に下ると考えられる住居址2軒とそこから出土した遺物も見逃せない。住居址はいずれも廃絶時遺構に礫を多数投入された特異なものであったし、遺物、特に土器は、この時期の資料が少ない当市域にあって組成などを探るのに格好の資料となつた。

島内地区における県営は場整備に伴う発掘調査は、今回が最後の予定である。第2章の周辺遺跡のところでも触れたが、過去5年間にわたり、島内遺跡群の5遺跡を発掘調査してきた。これに、当地区を南北に貫いた長野自動車道の建設に伴う発掘調査を加えたとき、その成果は何を物語ってくれるであろうか。積み上げられた様々な資料から、郷土の古代・中世の歴史を組み上げていく作業はまだまだこれからである。

最後に、今回及びかつての発掘調査に際し、多大な御便宜、御配慮を頂いた、島内土地改良区、島内公民館、出張所、その他関係機関の皆様、また寒風のなかを調査に協力していただいた皆様に心から感謝の意を表して結びといたします。

図 版



1 地区東から

流路址の3本のトレーナーが見える。



1 地区西から

手前は第2号住居址(左)、第1号住居址(右)。

奥に流路址のトレーナーがある。



2 地区北西から

手前が第3号住居址、その奥に第2・3号土壙、第1号溝址とならび東西に長く第1号溝址が続く。天幕左の調査区張出しは第4号住居址。



2 地区西から

手前が第5号住居址。その奥の一段低いものは試掘溝。右奥に1地区が見える。



第1号住居址

西から見たところ。中央の土柱は測量基準点で、本址の施設ではない。左隣は掘り下げ中の第2号住居址。



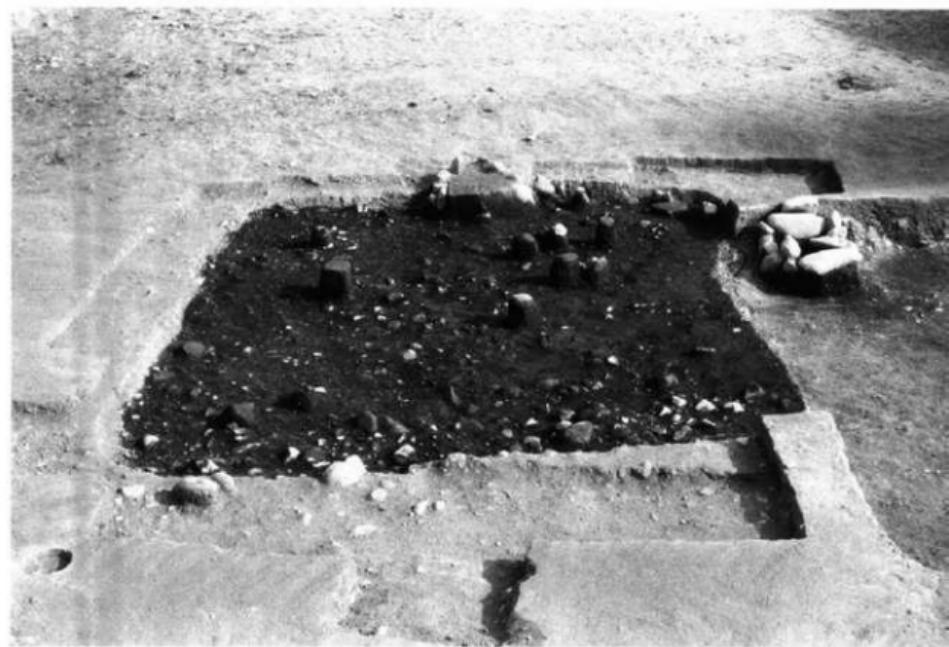
第1号住居址カマド

河原石を使って組んである。割石は手前に1つ見えるのみ。住居北東隅にある。



第1号住居址 磁・遺物出土状態

前頁と同様のアングル。



第2号住居址

西から見たところ。右隣は既掘の第1号住居址。
本址のカマドは未掘の状態。



第2号住居址

北から見たところ。壁高、床面の礫の露出状態など、奥の第1号住居址と比較して頂きたい。両者の時間差は約300年。



第2号住居址カマド

「ハ」の字形に石を立ててある。

中央の独立した円石は支脚石か。



第3号住居址

西から見たところ。

奥壁左寄りのカマドは石組みが崩れている。



第3号住居址 磚・遺物出土状態

上の写真と同じアングル。

土層観察用の土手はまだ撤去していない。



第3号住居址礫・遺物出土状態

北西の一角部分。



第4号住居址

床は外周部に礫の露出が著しい。西から見たところ。



第4号住居址礫・遺物出土状態

前頁と同様のアングル。左上隅の高まりが土器片・小石密集範囲。



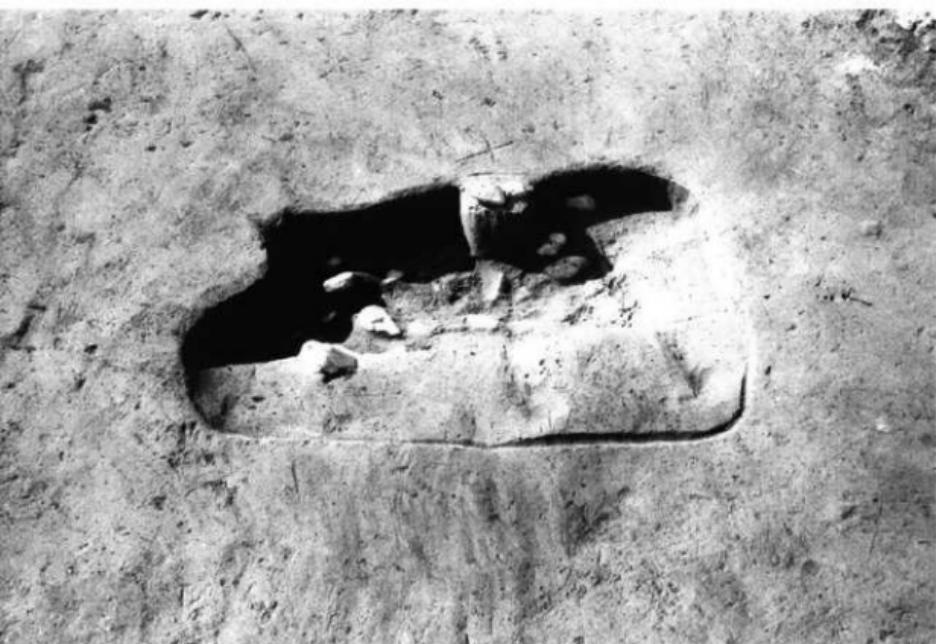
第4号住居址礫・遺物出土状態

上の写真の土器片・小石密集範囲
のアップ。



第5号住居址

東から見たところ。床面右側の段は手前が掘り過ぎ。



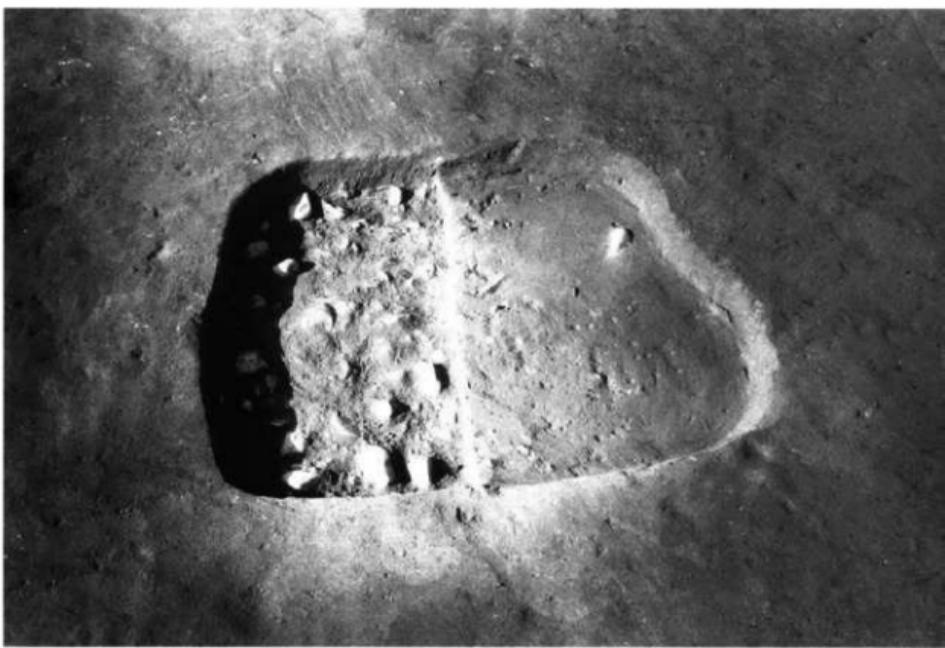
第1号土壙

北東から見たところ。奥半分は掘り過ぎ。



第2号土壙

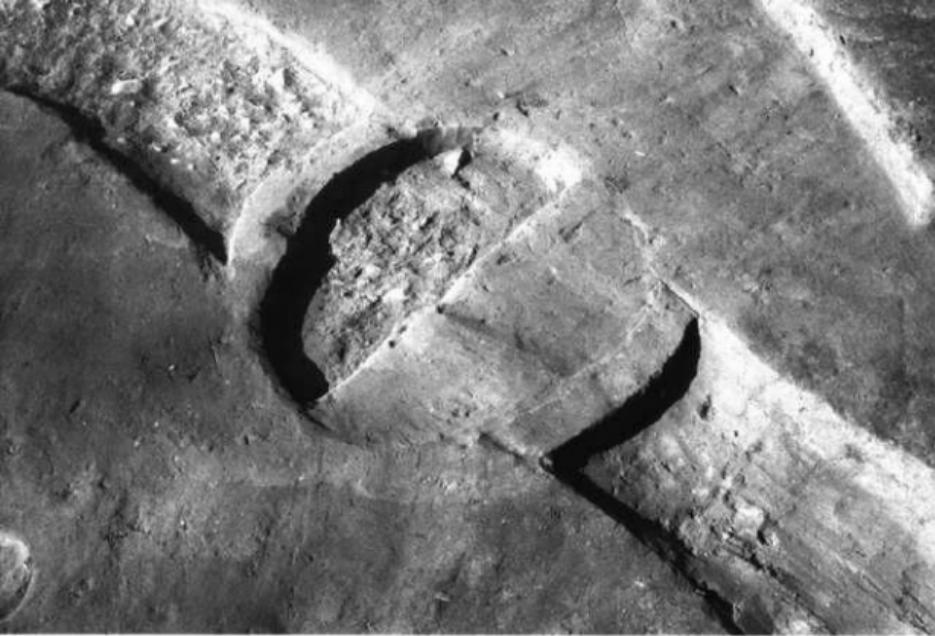
東から見たところ。左半分は掘り過ぎ。



第3号土壙

東から見たところ。左半分は掘り過ぎ。

いずれの土壙も地山と覆土の弁別が非常にむずかしい。



第4号土塁

第1号溝址を切っている。左上半分は掘り過ぎ。



第5号土塁

第1号溝址の東端を切って存在。内部にあるのは土器片。



第8号土壙

東から見たところ。上半分は掘り過ぎ。



集石

石の間には炭化物がひろがる。



第1号溝址

北東から見たところ。手前で第5号土壙、中央で
第4号土壙に切られている。



第1号溝址およびその周辺

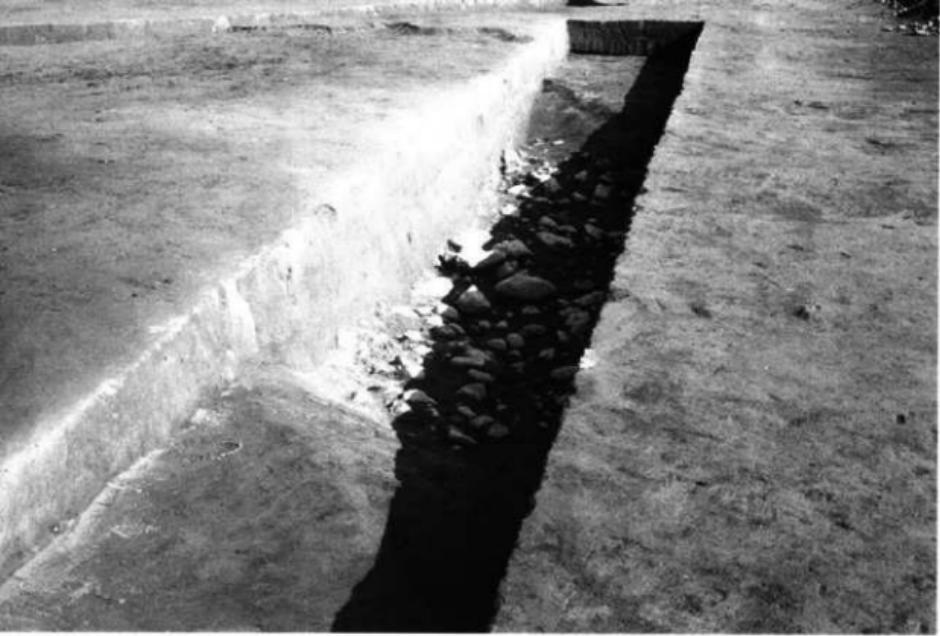
西から見たところ。左は第3号住居址。



流路址 1 トレンチ



流路址 2 トレンチ



流路址 3 トレンチ



ピット群



2H、坯



8H、内黒の碗



11H、内黒の碗



9 H、内黒の碗



9 H 内面、ラセン状の暗文



13H、内黒の塊



20K、皿



21K、段皿



22K、深碗 口縁内面に沈線がまわる。



23K、深碗



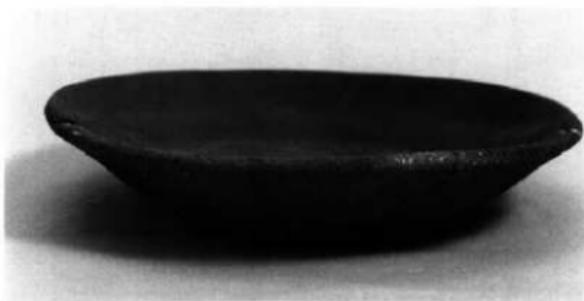
26H、坏



27H、坯



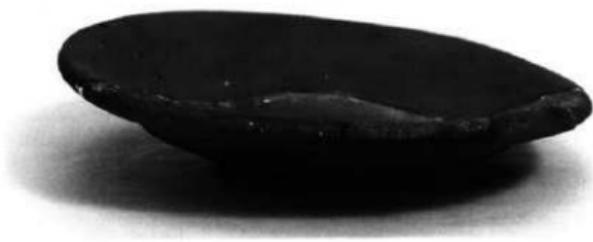
28H、坯



29H、坯



30H、坏



31H、坏



41H、坏



42H、塊



47H、内外黒色の塊 高台が欠損



50K、
長頸瓶



51K、折線皿



55S、坏



56S、坏



57 S、环



58 S、环



62 S、鉢



25S、壺 第1号住居址に混れ込んだ第2号住居址のもの



54S、小形の壺 検出面出土



土錘 左：第1号住居址出土、右：検出面出土



調査スナップ

松本市文化財調査報告No.71

松本市島内遺跡群

高 松 遺 跡

平成元年3月20日 印刷

平成元年3月30日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 川越印刷株式会社
